やまざき文化

'01－2＊No.20

山崎町文化協会

二十一世紀を迎えて

山崎町文化協会会長　壺　阪　　壽

「やまさき文化」も二十号になりました。毎号編集委員の皆様には大変ご苦労をおかけし、そのおかげで内容も随分充実してまいり、定めし文化協会員の皆様には勿論町民の方々にも大変よろこんでいただいているのではないかと思います。

扨、いよいよ新しい世紀になりました。例年の如く年が変わるだけでもなんだか新しい希望が湧いてくるのですが、それが世紀が変わると尚一層大きな響きとなって私等に迫ってくるように感ぜられます。

あゝもう二十世紀は過去のことになって新しい二十一世紀が始まったのだなあと思うだけでも新しい希望と夢が出てまいります。

振り返ってみますと二十世紀というのは、私等人類にとって実に様々な大きな出来事がありました。二度も大きな戦争をしたり、又国家の体制からくる競争によって起こる銃を持たない所謂〝冷戦〟なる争いも随分と永く続きました。

又、一方では科学技術の発展もすばらしいものがありました。二十世紀の初め頃、人が移動するのにこれ程自動車を使うとは何人も想像していなかったでしょう。それが現代では私等の山崎でも一軒の家に何台かの自動車があって、人々は移動の折には総て車を使うという状態であります。そして吾々が日常生活をする方法も随分と変化しました。二十世紀の中頃までは吾々の使う燃料は総て薪炭でありました。それが二十世紀の中頃より石油に変わり、従ってそれに対応できるような住環境へと変わっていきました。

このように数えてまいりますとまだまだたくさんの技術革新が私等の周辺には起こっています。然しそういった変革すべて幸福をもたらしたものではありません。私等は便利さも手に入れましたが同時に失ったものも少なくありません。

二十一世紀は政府のいっている「IT」を中心としたもっと大きな変化が吾々の周辺に起こってくると思いますが、矢張り大切なことは心の豊かさを失わないことであり、人々との和を大切にしていくことであります。

◇目　次◇

二十一世紀を迎えて　壺阪　壽　2
「お茶の文化」あれこれ　安井　道夫　3
回想「やまさき文化」　浅田　耕三　11
新しい大学院作り　三浦　良造　12
世紀の節目に思うこと　稲村　幸子　13
短　歌　稲村　幸子　14
俳　句　福田　泊水　16
千万の　藤井　七代　18
音水国有林での植物観察会　久宗　丑雄　18
ゴッホと絵　福岡　久藏　19
私の随筆　志水　美好　19
ストレスと川柳　山田　榮三　20
打てば響く心のふれあいを　久保　孝　20
平成会紹介　中道　忠志　21
文字のはなし　小川　登　21
昭和会より　安井　克典　22
やまさきミレニアムフェスティバルに参加して　志水　正信　22
児童合唱団の思いで　塚田ゆき奈　23
茶華との出会い　梶浦美智子　23
謡曲の想い出　福井　浩道　24
山崎小学校のタイムカプセル　山本　喜教　24
趣味と生きがい　西川　慶子　25
バンブーファイブと共に　松岡　潔　25
碁吉会姫路大会に参加して　松本　明　26
邦楽邦舞に親しむ　井口　定子　26
サッキ「光の司」の戯言　立花正太郎　27
事務局便り　藤村　清一　28
編集後記　荒木　俊介　28
表紙画／カット／　福岡　久藏
表紙題字　尾崎　正一

茶色の話
―「お茶の文化」あれこれ―

山崎文学会　安井道夫

「お茶の文化」など大上段に振りかぶってみても、私は「茶の湯」とか、数寄の「茶器」には縁ない衆生、ここでは「日常茶飯事」のもっと庶民的な話について語ってみたい。しかし、庶民的だからといっても、お茶の子さいさい、いい加減なところでお茶を濁すようなテーマではなさそうである。

お茶を飲む風習は、日本人にとってご飯を食べるのと同様の基本的な生活習慣で、世界を視野に入れても、やはりコーヒーと共に人々の日常性を二分する重さを持っている。ここでは茶樹の起源から、日本列島への茶の伝播と普及、製法から喫茶の方法、そうして「お茶とヨーロッパ文化誌」など気の遠くなるほど広範な興味ある問題が続々現れてくる。語り尽くせば日本文化の本質にまで及ぶはずであるが、私にできることは粗茶淡飯程度のほんの一服の話である。

まず、江戸時代初期の慶安のお触れ書に、「大茶を飲み、遊山ずきする女房」とみえるように、当時庶民が茶を飲むことは一種の奢侈風俗とされ、幕府が禁制をもって排除できると考えるほどの普及状態に過ぎなかったと思われるのである。

古くは遣唐使や留学僧によって茶の実が持ち帰られ、寺院の境内から、やがて各地の山野に自生するまでになるが、飲用はあくまで上流貴族・僧侶の間に留まって一般に普及することはなかった。鎌倉時代に入り、栄西禅師が抹茶の方法を伝え、茶葉の薬効を説いたため、再び茶の需要が高まり禅家から武家へ、さらに民間にまで喫茶の習俗は広まっていったという。

そうして室町時代、上級武士の間で茶数寄が流行し、将軍義政は経済崩壊をよそに唐物茶器蒐集に奔走し、東山御物（ヒガシヤマゴブツ）といわれ後々まで珍重される名品を選定、ようやく芸能としての茶道の確立に繋がっていくのである。

しかし、資料はないものの、民俗社会では茶と称して茶樹以外の樹葉を長期間にわたって飲用に供していたはずで、中尾佐助『秘境ブータン』（初版・昭三四）に面白い記述がある。それは南ブータンでのこと、照葉樹林地帯とはいえ、住民はチベット的インド的というより、むしろヒマラヤ的というほかない多種類の民族が住んでいる。「南ブータンの自然児たちの飲んでいるお茶は、自然のものだった。彼らはその原料を森の中で摘みとっていた。大きな竹かごを背負い、二、三人連れ立って森の中へ分け入って行く。目ざす茶の木は四種類。だが植物学的にみると、その中には一つも真正の茶の木は」なかったと記録している。日本の麦茶やはぶ茶など茶の代用品ではなく、茶樹といってもこのように何種類もの木の葉が飲まれていて、その中から照葉樹林の中心地西南シナ辺りの茶が、ついに世界的名声を得るに至ったのであろうと、中尾は推測するのである。

そのため、茶樹の起源を求めて多くの学者・研究者が、中国・四川、雲南（ウンナン）からインド・アッサムにかけての照葉樹林帯の山岳や丘陵地帯を渉猟（ショウリョウ）することになる。

結果、大葉のインド種・雲南種と葉の小さな中国種は無関係の種であるとする二元論が欧米の学者を中心に一時有力視されたが、やがて細胞遺伝学的研究や形質変異を重視するクラスター分析等により、中国雲南地方からアッサムにかけての照葉樹林帯の中にチャの起源を想定する一元説に次第に傾くようになる。茶樹の差は風土に合わせて改良された結果で、緑茶も、ウーロン茶も、紅茶にしても製法が違うだけで、すべてツバキ科に属するカメリア・シネンシスに収斂（シュウレン）されるのである。

さて、照葉樹林文化論といえば、日常茶飯事に関するイネ、チャだけでなく、ダイズ、アズキ、ヒエ、ソバ等穀類のほか、納豆、コンニャク、ウルシ、シソ、味噌、麹（コウジ）、蚕などから神信仰のかたちまで、基層文化の共通項が東亜半月弧を形成する地域で育まれたとするもので、もはや通説となり教科書にも取り上げられているようである。　仮説は、植物生態学、文化人類学、それに考古学、作物学など多くの学者たちの共同研究により深められていくが、きっかけは先にあげた栽培植物学の中尾佐助の眼力によるものであった。中尾は、一九五二年今西錦司を隊長とする日本山岳会のマナスル踏査隊に参加、夕暮れ時ネパール・カトマンズ近郊の山肌を覆う黒々とした森を眺めながら、ヒマラヤ山脈の南斜面に連なる森林が、中国南部から西日本一帯へと続く照葉樹林の植生帯であることに気づくのである。

その後中尾は名著の誉れ高い『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書　一九六六刊）で、世界を四つの農耕文化複合の視点から新しく捉えなおし、その中には「照葉樹林文化」の仮説も、構想の一環として提示している。それが、いつしか歴史学、言語学から日本人論までの広い分野を巻き込んで一人歩きしはじめると、イネの栽培化も照葉樹林の山岳でなされたかのような仮説の肥大化が行われるようになってしまう。

「雲南―アッサム稲作起源説」によると、雲南の長江支流域からインド・アッサムにか

けての地域で、約五〇〇〇年前イネの栽培がはじまり、紀元前一〇〇〇年には長江下流域に達し、紀元前後に日本に渡来、弥生文化が花開いたとする。

しかし、一九七〇年代長江・下流域の河姆渡を中心とする遺跡の発掘で、七〇〇〇年前すでに高度な稲作文化が営まれていたことが確認され、その後彭頭山、万年県仙人洞・吊桶環遺跡、玉蟾山遺跡等が次々発掘されるに及び紀元前一万四〇〇〇年と推定される栽培稲が発見され、稲作の起源が一挙に一万年以上も遡ると、黄河を中心とする古代文明史観の見直しや日本の縄文文化への稲作の導入など歴史観の大変革が要請されてくるのである。

しかし、湿性の雑穀であったイネとは異なり、山地になじむチャが照葉樹林帯山地に多数自生しており、周辺に生育する雑木同様樹高三〇メートルにも達する大樹もあるとなれば、大葉のチャの起源についてはこの辺りに限定せざるを得なくなる。

一方、一八世紀のイギリスでは、茶は薬品リストから家庭のなかへ移ってゆき、ようやくロンドンでも食料雑貨店で売られるようになるが、中国磁器の茶道具一式を備えるのが富とステータスの象徴となるほど東洋趣味が高じ、ついには茶が総輸入額の約四〇%を超え、まだそれでも足りずフランス、スペインから再輸入しなければならない状態であった。

茶がイギリス社会の生活必需品として急激に需要拡大したことが阿片戦争の勃発を生み、更にイギリスによるアッサム茶園プランテーション経営に繋がっていくのである。その端緒が一八二三年ブルース兄弟によってアッサム北東部丘陵地帯での野生チャ発見で、葉の小さな中国茶しか知らなかった専門家からは信用してもらえず、当初は世紀の大発見といわれる快挙も放置されたままで、なかなか日の目をみなかったようである。紆余曲折があったのち、アッサム種の葉を原料として中国人の手によって作られた緑茶がロンドンに送られ好評を博したのが一八三八年。ここからインド茶の製造が大々的にはじまっていくのである。

私の経験を語れば、最初の海外旅行がインド・アッサムからダージリンを経由して、ネパール・カトマンズに至る「ヒマラヤ山麓の旅」であった。国立民族学博物館「友の会」研修旅行というもので、照葉樹林文化論の提唱者のひとりで『熱帯の焼畑』『照葉樹林文化の道』等著書のある佐々木高明教授、また『お茶の来た道』『喫茶の文明史』の著者で日本文化論専攻の守屋　毅助教授が同伴、民族の博物館というにふさわしいヒル・トライブ（山の民）の生活にも直接触れることができたのである。

まず、アッサムの地形図をみるとインド亜大陸からはみ出した余分な瘤のような辺境として、インド旅行の案内書附属地図には切り捨てられているのもある。その東へ突き出た瘤の付け根は、ネパールとバングラデシュによって上下から締めつけられ、今にも外れそうな状態で細く括れてぶら下がっている。そうして狭長な河谷平野部の真ん中を大蛇のごとくブラマプトラ川が流れているが、この河はチベット西南のマナサロワール湖付近に発したツアンポ川で、サガ、シガツェを経て一路東に流れ、ナムチャバルワ峰を巻くように南下、一気にヒマラヤを落下して海抜一〇〇メートル前後のアッサム・バレーに流れ込む。それから急にUターンするように西に向きを変え、ブラマプトラとなって蛇行、分岐を重ねながら最後はガンジス川に合流してベンガル湾にそそぐのである。

資料から最大七〇マイル（約一一二キロメートル）という広大な川幅のスケールを想像することは困難で、そこに行き合ってはじめて納得できる広大さである。丁度、順調に走っていた車が補修中の道路を避けて、迂回路の山道にさしかかったとき、それまでただだだっ広い原野としか見えなかった風景が、俯瞰的に眺めやられ、視界の果てにその限界を引き延ばすかのようにギラギラ輝く水面をみた。雨期ともなれば、かの本流から目の前の湿地までが一面氾濫原の海となってしまうに違いない。

アッサム茶園は、この河に沿って延々と続いているのである。

後日、ガハティからダージリンへの登り口シリグリまでの夜行列車に乗ったが、翌朝目覚めて見る風景は、列車が動かなかったのかと錯覚するほど、昨夕のガハティと何変わることのない一面の茶畑の光景であった。

一九九〇年の統計で、アッサムの紅茶生産高は三四万トン、作付面積一九万二、〇〇〇ヘクタール、茶産業に依存する人々はアッサム全人口の一五%に達するとのこと。私たちが訪ねた一九七九年でも、作付面積一七万ヘクタールで、七五〇以上の茶園で七〇万人の労働者が働き、全世界紅茶生産高の四分の一を生産していると聞いた。

その時私たちは草原のなかに一本の滑走路があるだけのジョルハット空港に着き、車で二〇分ほど東に入ったシブサガールの茶園、「アッサム・ティー・カンパニー」を見学することができた。茫々と拡がるはずの茶園の光景は、日本で見なれた美しい曲線を描いた円やかな光景とは異質で、平地をシェイド・ツリー（庇蔭樹）が林のように覆い、視界を限っている。

アッサム種はもと山間奥地の亜熱帯の森林のなかで生育していたもので、葉も薄く広くなっていて、その栽培には比較的日照の少ない場所で高温多湿を必要とする。ところがブラマプトラ流域の低地平原は強烈な直射日光に晒された熱帯で、庇蔭樹を植えて人

工の日陰をつくらないと健全な生育はおぼつかない。

この茶樹の発見者でアッサム茶園監督官になったC・A・ブルースは失敗に失敗を重ねた末、太陽で葉をしおらせ、それを手で揉み、炭火で乾燥することで製品になること。茶樹は放っておくとどんどん延びるので、人の胸の高さに剪定し、それでも新葉が十分収穫できること。また庇蔭樹としてアルビジア（荳科）を植える等茶園プランテーションの基を築いていく。しかし、この功労者も初期茶園の経営不振から、アッサム・カンパニーを解雇されてしまうのである。

さて、イギリスが植民地インドに経営した大規模プランテーションは、協同組合など小さな茶園の集合物ではなく、その一つひとつが計画段階から大規模（平均一六〇ヘクタール）な未開地開拓を指向、外部とは隔絶した世界を形造り、エステートと呼ばれている。その中には製茶工場を中心に、マネージャーのバンガロー、労働者の住居はもちろん、病院、学校、教会なども備えたいわば完結型の村落社会である。

私たちが見た茶園の光景は、白色のサリーを纏い、下層のインド人特有の痩せぎすで背筋の張った女たちが数人宛茶樹の中に並んでいる。ちょうどひとの上半身ほどの大きな竹籠を頭に載せ、摘み取った茶葉を機械仕掛けのように竹籠に放り込んでいく。一方、摘みおわった茶を盛った竹籠を溢れるばかりに積み上げたトラクターが、大変な土煙りを立てながら戻ってくる。

労働者は一日八時間労働で、日給わずか六ルピー（約一五〇円）、しかも彼らの多くは一九世紀の後半ベンガル等インド各地から連れてこられた下層民の子孫で、当時「アッサムの茶園へ行くより、牢獄の方がましだ」といわれるほど過酷な労働で、ブラマプトラを遡る旅は三週間以上を必要とし、送り込まれた労働者の三分の一は半年で疲労困憊次々命を落としていったと伝えられている。

プランテーションの奴隷労働については後で考えるとして、まずアッサム紅茶の特殊な工程を見ることにする。私たちが見学したジョルハットの工場は、鉄筋コンクリート造の窓の多い明るい造りの近代的建築で、萎凋、揉捻（ローリング）、発酵、乾燥そして再製仕上げの五段階が行われている。ただし、アッサム種は葉が大きく、三〇センチにも達するので、ローリングの前に細かく切断する場合もある。

アッサムでは一二月下旬から約一か月間の整枝期間を除き、ほとんど一年中新芽が伸び、茶摘みが可能なので、製茶工場も年中稼働するのである。

萎凋は大きな建物の二、三階で行うが、数段の網棚を張り、網が見えない程度に薄く広げ、茶葉の水分が六〇～七〇％に落ち、萎れてやわらかくなるまで蒸散を待つのである。ここでは機械化といっても下からベルトコンベアーで生葉を運び、人工風を送って時間を短縮する程度。次が揉捻で、茶の葉の組織や細胞を砕いて汁液をだし、タンニンの酸化作用を進めて発酵し易くする。これは紅茶独特の香りや味のもとを作る発酵工程への第一歩と言うことになる。

私がその時土産品として買って帰り、以後もインドへ行くたびアッサム茶の代表のように思って探し廻ったカットリーフ・ティー（切断茶）は、工程を短縮して作った安価なCTCティーで、小さな粒になった珍しいものである。製法は簡易で、さまざまな方法で細かく切断して、揉捻を繰り返し、CTC機を使って茶葉をつぶし、ひきさき、丸めて粒にするものだという。

揉捻の後、縒れ、塊になった茶葉をベルトコンベアーで「玉解け篩い分け機」につないで、篩い分け、次の酸化による発酵の工程に移す。

発酵室は通常二〇～二五度の室温で、湿度九八％内外といい、揉捻した茶葉を平たく薄い発酵箱に入れ、棚に並べて発酵を促進させる。発酵時間は一～二時間位で、青みを帯びていた茶葉が、鮮やかな赤銅色に変わってくる。しかし、私たちが見たものは、特別の発酵室ではなく、工場内の風通しのよいコンクリート上に発酵箱は並んでいたような気がする。

四番目の工程は、乾燥で、いくつか並んだローラーでベルトコンベアー式に処理され、貯蔵に適するよう水分四％まで乾燥する。これで荒茶が完成する。

最後の製品になる工程が再製、仕上げ（ソーティング）で、荒茶は形状、大きさがまちまちで、木茎や粉、ゴミ等が混じっており、それらを除去し、歩止まりを少なく、無駄ない等級に製品化する工程である。

さて、暑いインドを旅行してほっと息がつけるのは、道路脇の茶店を発見、やっと一杯のチャイにありつけた時である。ホテルでの紅茶は、イギリス式の型式ばかりが残っていて実質が伴わず、味も素っ気もない。一方チャイの製法は簡単で、手鍋に煮立てたお湯のなかに紅茶を入れ、更に火を止めずに二分間ほど煮る。次に牛乳と砂糖をたっぷりと、ショウガなどの香料を入れ、再び沸騰したら出来上がり。布で濾してコップに注ぐ。このチャイには粒状のアッサム茶がもっとも適しているのである。

かつてのイギリス植民地インドの茶園プランテーションは、一九四八年のインド独立で、インド資本家の手に移ったが、茶園労働者にとっては首のすげ替え程度で、あまり大きな環境の変革は期待できなかったようである。

いま振り返って資本主義というグローバル化のなかで考えると、お茶が果たしてきた影響は甚大で、その影の血なまぐさい部分である近代奴隷制を中心に少々調べてみたいと思う。（角山　栄『茶の世界史　緑茶の文化と紅茶の世界』中公新書参照）。舞台はイギリスの紅茶文化である。

世界の茶の生産高の八割は紅茶で、二割の緑茶は日本、中国、台湾三国にほぼ限定され、茶の総生産八割という紅茶のうち約半分をイギリス人が消費しているという。このようにアジアの東の端で発生した代表的な植物で、また文化でもある茶がユーラシア大陸の西の果てのイギリスに生活必需品として深く根を下ろし、砂糖とミルクを入れる紅茶文化を創出したことは資本主義という物質的奢侈（シャシ）指向がなければ成就しなかったことである。

モンゴルやチベットで、茶にミルクを入れて飲む習慣はごく自然なことで、何の奇異さもないが、砂糖を入れて飲む方法はイギリス人独特のもので、非常に逆説的な物言いをすれば、砂糖が銀塊に匹敵するほどの貴重品であったからである。もともと中国から輸入される高価なお茶に、補完財としての砂糖を添加することは誇るべき奢侈贅沢であったうえ、植民地主義の上に乗っかった一種の奢り（オゴリ）であっただろうと、角山は述べている。それゆえ、イギリスの茶文化は物質的奢侈を経済発展に導いた最大の契機になったのである。

そうして紅茶文化は紅茶帝国主義として展開していくのであるが、「一つは西インド諸島における砂糖植民地の確保であり、いま一つは中国茶の支配、あるいは植民地における茶樹の栽培とその生産・確保であった」。紅茶帝国主義は西インド諸島へ、もう一つは東洋へ。地球を両翼で覆うように展開していくのである。

以上のように茶が補完財として砂糖を用いたことの結果、近代史にイギリスによる砂糖市場制覇をもたらしたが、それは目を覆いたくなるほどの非人道、残酷な方法によってである。十七世紀の中頃、バルバドス島開発以来砂糖植民地は西インド諸島において急速に成長していくのであるが、砂糖きび栽培には高額な資本投下と苛酷な労働が必須の条件であった。ニグロが居なければ、プランテーションは存立できず、いわゆる奴隷貿易を制するものが、砂糖を制する結果になったのである。

イギリスの国益は、アフリカ西海岸で、年々増加する需要に応じるだけの奴隷を確保できるかどうかにかかっており、一六七二年には王立アフリカ会社を創立、王室自身が非人道的な奴隷貿易に参加し、保護する始末であった。

奴隷は一片の綿布や、タバコ、酒などと交換されて、手かせ足かせで船底に積み込まれ、水や食事もろくに与えられず数十日に及ぶ熱帯航路で連れ去られてきた。一六九四年王立アフリカ会社のハンニバル号は七〇〇人の奴隷を満載してアフリカ西海岸を出発したが、航海中半分近い三二〇人が死亡したという。すべて砂糖プランテーションの労働力需要のためのものである。

一方、東洋に延ばされたイギリスのもう一つの翼のもとでは、茶と綿布とアヘンが三角貿易として、西インド諸島同様のパターンを繰り返すことになる。角山は述べている。「かつて東洋文明の栄光を代表したインド綿業が、ほぼ潰滅の運命を辿っていた一八三〇年代、もう一つの東洋を代表する中国と中国茶が、同じくイギリスがしかけたアヘン戦争によってインドと同じ運命を強いられつつあったことは、はたして歴史の偶然であろうか」、と。それによって、中国、インドともイギリスからは工業製品を購入し、イギリスへは農産物を輸出するという理不尽な国際分業体制のなかへ無理やり繰り込まれていったのである。

さて、次にアッサム茶園とは異質なダージリンの茶園へ辿るのであるが、先にアッサム・バレーを取り巻く環境について述べておく必要があるようである。まえに述べたようにティー・エステートは完結型村落で、アッサム・バレーに存在しながら周辺の農家とは習慣・制度を異にした別世界を形成している。

そうしてエステートを取り巻く本来の農家はアッサム人、ベンガル人の集落や新参のネパールからの移住者の村が散在して、日本中世を思わせる佇（タタズ）まいをみせている。ブラマプトラ沿岸の平地を取り巻くアッサムの大部分は山地で占められ、シロン高原、カシー、ガロ丘陵などには、多くのヒル・トライブといわれる人々が生活していて、そのほとんどがモンゴロイドで私たち日本人とは目鼻だちが酷似している。

おもな部族は、ミリ族、ナガ族、カチャ族、カシー族、ガロ族などで、山地を歩いていて突然チベット風タルチョー（幡）や鳥居に出会って驚いたことがあった。

私たちはシロンへの急な斜面を登ったが、過度の焼畑のためか赤茶けた土が露出していて、これは強い日射に土壌が鉱物化したラテライトであるらしく、あちこち疎らにバナナが植わった程度のやせ衰えた殺風景な光景を呈している。山頂近くも照葉樹の原生林のかげはなく、照葉樹林の末期症状だという松林がどこまでも続いている。シロンに限らずダージリンなどイギリス植民地時代の避暑地は、必ず山地山頂付近鞍部に近代的な都市景観が展開し、階層的にインド人、続いて山岳少数民族の居住区と層をなして下方に広がっている。当然私たちの旅の目的の一つは、ヒル・トライブたちのバザールで

照葉樹林文化特有のさまざまな事物を探し出すことであった。

照葉樹林帯にすむ人たちは、雑穀類の中からモチイネ、モチアワ、モチキビなど粘性の強い品種を開発し、またミソ、ナットウなど発酵食品が広く分布しているが、このシロンのバザールで米と獣肉のナレズシを発見したのはやはり驚きであった。

お茶利用の形態については、「食べる茶から飲む茶」へというのが発展過程とされているが、ここアッサムからミャンマー、北タイ、中国雲南の山岳地帯にかけて喫茶習俗の原初形態を思わせる様々な茶の利用が行われている。

アッサム種の大葉茶樹が発見された東端ロヒットに、チベット・ビルマ系のジンポー族が住んでいるが、彼らは茶葉を蒸して竹筒に詰め、それを土中に埋めて、発酵するのを待って食するという。またジンポー族に近いタンサ族も茶を造っているが、彼らは小さな茶の芽は、鉄板やトタン板を使って炒るか、日干しして乾燥させる。それを竹筒に入れ、半年から、長いものは三年間そのまま天井に吊るしておき、削って飲用に供するという。

私たちの旅の同行講師守屋　毅先生は、帰路バンコクで別れひとりミエン（噛み茶）調査のためタイ奥地へ入られたが、その報告によると、ミエンも照葉樹林文化の中の発酵食品の一種であることがよくわかる。（『季刊　民族学』⑪号）

「ミエンの木」はアッサム種茶樹であるが、標高一〇〇〇㍍以上でやっと目にすることができる焼畑の植物である。バナナ畑ととなり合って栽培されることが多く、椿と見分けがつきかねる七～一〇㍍にも成長する喬木で、茶摘みは木に登って行う。茶葉は一五センチ以上二五センチほどの大葉で、摘んだ葉がたまってくると竹ひごで束ね竹籠に入れていく。

ミエン造りの工程は、簡単にいえば蒸す、束ねる、詰め込むの三工程であるが、詰め込みが大切で、容器は人が何人も入れる程度の大きな竹籠で外側に泥をぬり、内側にバナナの葉を敷き、それに寸分の隙間もないようにトオ（茶葉の束）を詰め込んでいく。足で踏みつけ、空気が入らないように密閉して「ミエン小屋」の軒下に保存する。しかし、この方法で造りだされたミエンは弱発酵タイプで、強発酵のミエンになると井戸のような穴に漬け込み、漬物石同様の石を二、三〇個も載せて発酵を促し、三か月目に食べごろになるという。ナッツ、肉、脂等を包んで食べるが、南部のキンマ同様嗜好品として利用するときは、少々の塩を加え、味がなくなるまで噛みに噛み、最後にはカスまで飲み込んでしまうという。

また、ミャンマー東部に居住するパラウン族では、漬物にするまでの製法は同じでも、その出来上がった発酵茶をご丁寧に細かく刻み、臼で突き潰し、木の枠に入れて、日に干す。これが一種の固形茶である。

ところが、わが国四国山地の大豊町でも、つい最近までこの固形茶に酷似した「碁石茶」というものが製造されていたのである。製法は摘み取った茶葉をカビが生えるまで放置しておき、その後容器に入れ石で重しをして十分発酵させる。それを搗き潰し、つまんで塊にして固形茶をつくったのである。これは中国でいう「餅茶」で、「食べる茶から飲む茶」へのプロセスを示すものかも知れない。

さて、道草が長くなったので急いでダージリンへ登らなければならない。途中、標高一〇〇㍍付近のベンガル平野にアッサム茶栽培のドアース茶園があり、それに続いてネパールに延びた野生動物の生息で有名なタライ平原が広がっている。バスはそこを突き抜け、標高二三〇〇メートルの山頂まで急峻なヘアピン・カーブを登っていく。茶園は頂上付近から北のシッキム国境ティースタ川沿いまで、一面の起伏を埋め尽くし、シェイド・ツリーのない光景は、日本の静岡辺りの茶園を彷彿（ホウフツ）させる。

ここも山頂付近はカルカッタの避暑地として開発された美しい街で、またヒマラヤ山麓の様々な民族のバザールとしても知られているが、何といっても「ダージリン茶」の産地として有名なはずである。

ダージリンの街を歩いていると、突然谷底から霧が湧き出てきて、どこか辺鄙な海岸縁を歩いているような錯覚に見舞われる。これは、ベンガル平野から立ちのぼる暖気のためだといい、その霧が茶園に水分を与え、乾燥から茶樹を守る。雨期には昼間で四〇度C近くなるが、夜間には一〇度Cに降下して、世界一といわれるほどの日温格差があり、これがまたダージリン紅茶独特の香気を生むのだという。

アッサム茶園との外観の差は、ただシェイド・ツリーが見られないだけでなく、ここでは小葉の中国雑種が多く栽培されており、仕立て方もアッサムの畝作りに対して株仕立てで、茶園は一見後期印象派の点描絵画をみるような趣を呈している。

また、味、香りの高級感覚は、特殊な気象条件によってももたらされるが、小葉種と大葉種を交配して両者の優れた特徴を引き出すよう改良されたことが重要で、これこそが風土にあった品種改良の成果である。アッサムの大葉樹は、紅茶の一つの生命であるタンニン含有量こそ多いが、香気に乏しく、とくに薄葉の関係もあって寒さには極端に弱い。一方、中国種は耐寒性に強く香気はあるが、紅茶に必要なタンニン含有量は少ない。

それぞれの優れた性質を一身に集めた雑種を作りだし、それが紅茶世界一の名声を得ることになった由縁だという。

ダージリンの茶摘みは十一月中旬から翌年四月中頃まで休む。茶摘みの方法は、一心に一～二葉を厳守していて、それも高級茶の印象を強めているようである。

私個人の問題としては、チベット難民による絨毯工場にも行ったが、ダージリン郊外のゴンパ（チベット仏教寺院）を見学したことがチベット文化との最初の出会いで、その後あちこちチベット文化圏を旅行したのもその時の印象が強かった後遺症に違いない。今は中国茶を語る契機として、チベット茶に限定して報告したい。

まず、固形茶の磚茶（茯磚・康磚）を少し削りとり、それを湯をたぎらせた鍋に入れ、濃く煮だしたお茶を作る。次にドンモという七〇センチ程の丸い筒に入れ、バターと少量の塩、ソーダを加え附属の攪拌棒を上下してよくミックスする。

最初は茶といわれてもなかなか納得できるような味ではなく、私たちには飲みにくいものであるが、チベット人にとっては日常茶飯事以上の必需の飲物で、お茶なくしては一日も日が過ぎない状態である。茶碗は木製で、底が広く、強い風にも倒れないようになっており、この茶碗にバター茶を注ぎツァンパ（大麦を炒って粉にしたもの）を練って丸めて食べるのがチベット人の主食である。一般チベット人は筒袖のどてら様の上着を着、片袖脱いで帯をしめているが、そんなだぶついた懐に茶碗をいれ、どこへなりと持ち運ぶ。お茶は、遊牧テントなど同胞に行き合えば欠乏することはなさそうである。

磚茶は、中国では黒茶に分類される後発酵茶で、他にすでに見てきた完全発酵の紅茶のほか、半発酵の青茶（岩茶、ウーロン茶など）、弱発酵の黄茶・白茶（銀針、白牡丹など）、それに非発酵の緑茶（龍井茶など）がある。

バター茶の原料になる磚茶についてみると、白茶に対するに黒茶といっても、白、黒の語感から一概に黒を断罪するようなものではない。日本の抹茶では「白」は薄茶で、「百」に一足りない九十九で、立春から数えても成熟度の足りない、充実度の劣る茶ということになっているようである。

しかし、中国本来の白茶は、春半喬木の茶樹の白い芽が膨らむのを待って、白毫をつけた針のような芽だけを摘み取り、ほんの短時間日光に当てて発酵させ、すぐに低温加熱で発酵を止める。銀針白毫にしても、白牡丹にしても白磁の美しさに通じる相当貴重なものであるらしい。

この高貴ともいうべき白茶に対して、馬糞か煉瓦を思わせる固形茶・磚茶はどうも分が悪い。『日本国語大辞典』には、センチャの音では「煎茶」の項しかなく、磚茶は「だんちゃ」でのみ掲載され、「シベリア・モンゴル地方で飲まれる下等な茶。紅茶・緑茶の屑をかためて、うすい板のようにしたもの。けずって湯に溶かして飲む」とある。少々厳密さを欠く記述である。

磚は瓦の意味で、磚茶は煉瓦状の黒茶「団茶」の総称である。製法から緊圧茶ともいわれる団茶の産地は、それぞれに特定の場所があり、また個々決まった消費地へ送られて行くのであって、生産地で消費されるのはそのうち極々少量に過ぎない。雲南、四川、湖南、湖北などで生産された後、チベット自治区、ウイグル自治区、青海省、内蒙古自治区等へ運ばれていくもので、そのうちチベットへ送られる「茯磚茶」は辺銷茶と称し、略して辺茶と呼ばれているようである。

また辺茶の製造工程は、若芽を摘んで作る製茶とは随分異なり、四川省だけでみることができるものだという。原料茶→篩分→選別→切断→棟別→堆積発酵→炒乾→配合→秤茶→蒸茶→圧製→包装→貯蔵と、約十一の工程を経る手間の掛るものである。篩分けは、原料の茶が枝ごとに摘み取ったものなので、その枝を取り除く作業。堆積発酵工程は、チベットなど山岳遊牧民のための茶には必須の条件で、羊の肉などの常食には脂肪分解を促進する堆積発酵の麹菌の繁殖が役立つという。

常々不思議に思うのは、辺境に居住する遊牧民は新鮮な野菜を食せず、ビタミン等の不足に悩まされるので、茶を日に何杯も飲み、そういう不足の栄養を補うのだという。学者を含め、チベット旅行記のほとんどにそう書いてある。しかし、紅茶にすら含まれないビタミンCが、このような工程を経る「辺茶」に残っているとは考えられないことである。

もう一つの先入観は、中国茶を飲む場合、まず容器を温め急須に茶を入れてから湯を注ぐというところまでは当たり前のことであるが、ウーロン茶など第一煎は飲まずに棄ててしまう習慣が根強く行き渡っていることである。

先にプーアール茶が、先日のラジオでは同じ黒茶の沱茶（トゥチャ）が万病に利くと大宣伝に努めていたが、この沱茶や六堡茶等では「陳茶」、すなわち古茶が尊ばれているようである。とくに六堡茶は古ければ古いほどよいとされ、製造過程で「陳化」を加えるほどで、香港などでは陳化が当たり前の茶に「陳年六堡茶」と名付けて売っている程だという。このような黒茶は歳月に耐えて保存されるため、ゴミや埃が付着してそれらを洗い流し、茶葉の目を覚ます必要があるという。

確かに台湾では日本の煎茶道に近い工夫茶というものがあり、正式には素焼きの小風炉、急須は朱泥などいささか規制がうるさく、いわゆる「洗茶の法」を後生大事に守っ

ている。『お茶のある暮らし』の著者谷本陽蔵は、茶舗店主としての職業柄洗茶の習慣を厳しく批判するのである。

お茶の手揉み、手作りのための手垢や汗、さらに製造工程での不潔な環境がなくなった現在、なお熱湯を使用する洗茶は、いたずらに栄養素、タンニン等のうまみ、香り、色などお茶の持つ新鮮さの七五％も失わせる愚かな行為だとする。

「・・・百歩譲ってウーロン茶だからいいのだといわれても、お茶の正しい淹れ方とは、とうてい思えない。・・今日、常識的に判断して納得できる淹茶法であるとはとてもいえない。それでもその道の人々が、依然として頑固に守っているのは、後々いっそう間違いを拡大することになるのではなかろうか。第二煎めがおいしいというのも真っ赤な嘘である」、と述べている。

さて、いよいよ中国お茶文化の中心にたどり着いたわけだが、何をおいても最初に、茶聖・陸羽の『茶経』に触れないわけにはゆかない。唐代の著作であるが、史書における『史記』の地位を占め、その後のお茶に関する膨大な著作はすべて、この書物の一部の注釈書に過ぎないといわれるほどである。

一之源（茶の起源）の書き出しは、「茶は南方の嘉木である。木の高さ一尺、二尺から数十尺に至るものまである。その巴山や峡川のものは、二かかえほどのものがあり、そのようなものは枝を伐って葉を採む」（布目潮渢訳）とあって、復州竟陵（湖北省）の人陸羽が、南方のどの辺りまで自身の目で確認したものか不明である。

戦後の私の経験で、田舎家を訪ねたとき、番茶に砂糖を入れて振る舞われたことが一再ならずあるが、これは砂糖が貴重品であった名残りであろう。中国北方の山西省の辺境では、今世紀に入ってからも茶自体が貴重で、女子供は白湯を飲み、家長はひとり、特権として磚茶を飲んでいたという状態であった。（竹内　実・羅　漾明『中国生活誌―黄土高原の衣食住』参照）

喫茶が歴史上中国で国民飲料としての地位を固めたのは、酒やその他の飲料に比べて遅く唐代の出来事であったが、一旦普及しはじめると茶の味の追求に熱心で、喫茶の方法も時代を追ってさまざまに変化してきたのである。

ちょうど、今年の夏、大阪市立東洋陶磁美術館で『唐皇帝からの贈り物　中国の正倉院・法門寺地下宮殿の秘宝』という展覧会が開催された。法門寺は成安の西一二〇キロの所にある名刹で、十七代懿宗皇帝のとき、塔下に「金骨（舎利）」を探し当て、唐朝衰退の兆しのなかにもかかわらず豪奢盛大な舎利奉迎の儀を行った記録がある。今回の展示品は、一九八七年地下宮から発掘されたもので、唐歴代皇帝の下で奉納された精緻を極めた文物の数々であるが、そのうちに茶道の原点ともいうべき数点の茶具があり、『茶経』の記述を理解するのに大変役立つのである。

『茶経』に記載の餅茶の製造工程は、まず摘んだ葉を甑で蒸して発酵を止める。次いで臼と杵を使って蒸した葉を搗き砕く。砕いた葉は円型、方型、花型など様々な型で固め、中心に穴をあける。その穴に竹串を刺し連ねて、地面に掘った竈の上に並べ、かざして炙り、乾燥させるのである。固形茶になったものは竹串、藁縄などに刺した状態のまま、湿気を吸わない工夫を凝らして保存する。

このようにして作られた茶は、分類上は緑茶であるが、その後の乾燥工程に時間が掛かり、非酵素性の黒茶と同じような後発酵が起こりうるとも考えられ、二日もかかって仕上げた餅茶の表面は多分黒く変色したものと考えられる。

次に喫茶の方法であるが、これは当時の言葉で「煎茶」といわれ、遣唐使の手によって日本へも伝えられたものである。まず、餅茶を竹ばさみで挟み、その表面が膨れる程度まで炙って、それを熱いうちに紙袋に入れ、碾（薬研）で挽いて粉末にする。

粉は茶碾とセットになった茶羅でふるって、細かい粉末を取り出す。風炉には湯を沸かすための鉄釜が載せてあり、たぎって泡が出始めると、塩を入れる。

連なった泡がでるようになると、湯の一部を別の容器に取り除けておき、竹箸で湯をかき混ぜた後、ここでやっと定量の粉末茶を釜の中心に向かって投入する。

一度沸騰した時点で取り出しておいた湯を再び釜に戻し、温度を下げて茶華の生ずるのを待つ。そうして、やっと飲用に供するお茶ができ上がり、杓を使って茶碗に取り分けるのである。

地下宮発掘の茶道具には、茶葉を入れて乾燥させる「提梁脚付籠」、塩入れの「摩竭文蓮華形三脚蓋付塩盤」、「飛鴻文匙」などすべて銀糸や銀鍍金の豪華なものであるが、特に目を引くのは「銀鍍金　天馬流雲文茶碾」で、固形茶を粉末にする薬研である。

『茶経』には、「碾は橘の木で作る。・・臼を作るには、内は円くし、外は四角にする。内は円いのはよく廻るためであり、外が四角いのは傾かないためである。内には堕を容れ、外に他の木はない。堕の形は車輪のようで、幅はなくて、軸がある。全体の長さは九寸、幅は一寸七分、堕の直径は三寸八分、中の厚みは一寸、辺の厚さは五分、軸の中央は四角いが、取手の部分は円い」と、実物を彷彿させる描写がある。しかし、咸通一〇年（八六九）の銘がある地下宮発掘の茶碾は宮中御用達のもので、座、側板、上板、それにこま状のうす軸からなり、花文、流雲文や天馬が線刻された鍛製品で、線描模様

は金で彩色され、繊細で、豪奢な工芸品である。

この茶の原点において、すでに完成された茶論『茶経』を生み、茶具までが栄華絢爛たる唐文化の一翼を担うまでに急激に成長し、そればかりでなく周辺の庶民をも巻き込んだ飲茶の習俗は、すでに止めようのない文化流行であったのである。

当時主流であったのは当然餅茶であったが、そのほか粗茶（番茶）、散茶（葉茶）の利用もあった。とくに庶民は茶のなかにネギ、ショウガ、ナツメ、ハジカミ、ハッカなど様々な香料を入れて飲むことが少なくなかったようで、陸羽はこれを強く論難。純粋に茶だけを飲むことを提唱し、宋の点茶から明・清の泡茶に発展していく基礎を据えたのであるが、その精神の中心に置かれたのが「倹」である。茶は「味が至って寒であるから、行い精れ倹の徳のある人の飲むのにもっともふさわしい」といっているが、これはイギリス紅茶文化の発展とは対極にある東洋的な考えである。

法門寺の秘宝で、もう一つ疎かにできないのは秘色青磁の発見で、さまざまな詩文で称賛され、言葉は一人歩きしながら実態は不明で、越州窯青磁が漠然と秘色青磁に擬せられていた。ところが地下宮の漆塗の曲げ物に保護され、一つ一つ丁寧に紙や布に包まれた青磁器こそ、紛れもない「秘色」で、「衣物帳」の記載でようやく明らかになったのである。『茶経』には、邢州の磁器は白いので茶の色は丹く見えるが、越州の磁器は青いので茶の色は緑に見える。よって、赤い茶の色がそのまま見える白磁より、青磁が優るといい、秘色青磁が制作されるに至った背景まで推測できるのである。

栄西が日本に持ち帰ったのは唐につぐ宋の点茶で、これこそが後のわが国の「茶の湯」に発展していく。

点茶の特徴は、湯を注ぐための口の長い湯沸かし（湯瓶）で、また固形茶で重んじられたのは福建省北苑のものであり、五代から宋初にかけて改良されたのである。

宋代の茶書は、蔡襄の『茶録』と、徽宗皇帝の『大観茶論』が有名で、それらから点茶の手順をみると大略次のようなことになる。まず、固形茶を金槌で砕いたあと碾で粉末にし、羅で篩にかける。ここまでは、唐の「煎茶」とあまり代わり映えがない。次に盞（茶碗）に茶末を入れて、上から湯瓶の湯を注ぎ、匙または茶筅でかき混ぜるというもので、唐の飲茶法に比べ随分簡便になったようである。

また、宋代には散茶（葉茶）の生産も盛んになり、これを点茶で飲む場合は石臼を用いて茶末にしたので、すでに江南を中心として固形茶から葉茶への変化が、進化といえるかどうかは別としても徐々に進行していたのは確かである。

明代になると、緑茶製造の技術的改良が急速に進んで、従来の製茶法では蒸して日に晒すのが一般的であったものを、釜で炒って火で乾かす方法に転換させたのである。それは蒸青より炒青の方が、技術的にも簡単な上、茶の生命である香気をより多く保つことができたからである。

このため明代以降、緑茶はますます発展し、現在では中国茶の七割が緑茶で、近年わが国でも珍重されるようになったウーロン茶は、わずか一割にも満たないのが現状のようである。

「泡茶」といわれる明清以後の散茶は、そのままの葉茶に、直に湯をかけ、味と香りを抽出して飲むもので、わが国には江戸時代初期隠元などの渡来僧によって伝えられたのである。すでに伝えられていた「抹茶法」が権力と結びつく傾向があったのに対し、緑茶は庶民に拡がり、ついにわが国の「日常茶飯事の世界」を作りだしていったのである。

ただ、お茶ぐらいと高を括っても、茶もそれぞれの民族の心を反映する鏡のようなもので、茶葉の摘み方一つにもそのような差異がきっぱりと顕現するようである。

春、芽枝は五～六葉まで開いて、出開き状態でいったん成長が中断する。手摘みの基準は一心二葉を摘み、機械づみでは一心三葉までが基準で、深摘みすれば収量は増すが茶質が落ちるといわれている。

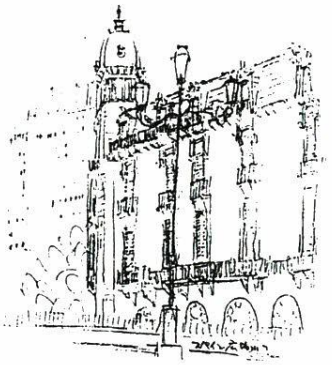
ひとが製茶を考えついたとき、一心三葉より、一心一葉・一心二葉に香気があり、嫩芽であれば手摘みも簡単、蒸したり、釜炒りしたあと、揉捻するのもかるくするだけで済むことに気づいたはずで、むしろ、関心は製茶したあとの香気をどう逃さないで保存するかにかかっていた。

そうして、茶の庶民への普及に対応するために、苗種を選択することも重要であったが、大量生産を視野に置いた場合一心一葉ではなく、一心二葉・一心三葉まで利用し、それを良質茶に仕上げる技術が必要になってきたのである。「可溶成分がよく茶湯にでるため、十分揉捻する。香味のためには萎凋の最適度を探究する。保存のためには、乾燥と整姿を工夫する」（光岡雅彦『中国茶のすすめ』参照）。そのような本格的な挑戦の結果作りだされたのが現在の中国茶で、あまりの洗練化・形式化に現を抜かした日本茶の文化は、高級化と大衆化に大きく引き裂かれ、かつては木、米とともに民族文化の基礎を作り上げながら、現在缶ドリンクやペットボトルのなかに消滅しかかっているのではないだろうか。

こんな言葉がある。「人間の理性の及ばない大自然のシステムがお茶に投影されていると感じたとき、生きる本質としての生命への礼賛を同時に人は感じているのではない

だろうか。だからお茶は、あらゆる地域、領域で生き続けてきたのではないか」（左能典代『中国名茶館』より）。

それ故、日常茶飯事の茶は、私たちの社会の生き死にを判断する一つのアンテナの役割を果しているのかも知れない。



〔参考文献〕
守屋　毅編集『茶の文化　その総合的研究』第一部、第二部
守屋　毅『お茶のきた道』、『喫茶の文明史』
松下　智『アッサム紅茶文化史』、『幻のヤマチャ紀行　日本茶のルーツを探る』
『中国茶　その種類と特性』、『茶の民族史　製茶文化の源流』、『日本銘茶紀行』
熊倉功夫・杉山公男・榛村純一編『緑茶文化と日本人』
左能典代『岩茶　究極のウーロン茶「大紅袍」の世界』、『中国銘茶館』
矢沢利彦『東西お茶交流考　チャは何をもたらしたか』

回想「やまさき文化」

浅田　耕三

「やまさき文化」の発刊は一九八二年二月でした。年一回の発行ですから二〇〇一年の今年はちょうど二十号となり、もう、そんなになるのかと時の早さに今更ながら驚かされます。

昨秋、鬼籍に入られた、当時山崎文化連盟の副会長だった伊藤親保さんらのご尽力で企画立案された、と記憶しております。

発行の目的は山崎文化連盟を構成する当時十九団体の相互理解と協力をはかり、もって文化の香りゆたかな山崎町として発展することでした。が同時に、町民の文芸誌として、短歌、俳句、詩や小説、随筆、評論等の発表の場としたいというねがいもありました。

そのねがいと期待は初刊の、文化連盟会長庄静夫さんの「発刊を祝して」と題する巻頭言にも、九人の編集委員を代表した編集長根岸元彦さんの編集後記にもこめられています。

当時、編集会議は楠風閣で開いていたように思いますが、表紙の色を何にするか、というような事にもかなり時間をかけて話し合ったのを懐かしく思い出します。

初刊には小説、随筆、評論がならび、その体裁は二十号を迎えた今も続いていますが、協会の現会長壺阪寿さんのお話では、このような散文文芸を載せる文化団体の機関誌は県下でも珍しいとの事で、その文芸誌的趣向は今後も維持発展させていきたいものです。

いま、バックナンバーを繰って当時を振り返ってみますと、そのころ編集にたずさわりいろいろとご指導下さった年配者はすでに亡くなられた方も多く、往時をしのぶと寂寥の思いひとしおですが、その先達によって打たれた黄金の釘は、今後ますます磨き上げられていく事でしょう。

しかし、悩みもあります。編集委員もご多分に洩れず高齢化がすすんでいる事で、巻頭の随筆評論小説の書き手も毎号同じ顔ぶれで、これでは読んで下さる方も新鮮味がなくなるだろうと心配します。

人口二万七千の町です。文芸に関心をもち書いてみたいという意欲をもった若い方はたくさんおられるでしょう。特に最近の不安と矛盾にみちた社会に対して、内部につき上げてくる、やむに止まれぬものを若い人はもっておられるはず、軽躁、頽廃、貪婪、何でもござれの世相にぜひ自分の言葉で物申してほしい。警鐘をならしてほしい。

「まず隗より始めよ」という中国故事に因んだ箴言もあります。

二十号を発行するにあたり昔を回想して感想をかけという事務局長さんのご指示によって駄文をものした機会に若い人のご参加を呼びかける次第です。

新しい大学院作り

一橋大学大学院国際企業戦略研究科
教授　三浦良造
（山崎町山田町出身）

一九六五年に山崎高校を卒業して以来もう三十五年になります。山崎を出てから、大阪、米国カリフォルニア州、再び大阪・奈良、そして東京・山梨へと移り住みましたが、ずっと大学の人間として仕事をしています。数学をベースとした数理統計学、そしてデーター分析の研究・教育を仕事にしてきたのですが、今年は私が関わっていることが世間から注目されることが多いのでそれについてお話いたします。

金融工学と金融業務

現在、金融工学と呼ばれている学術研究そして実務の分野があります。マスコミでは、三年程前から、マネー革命とかデリバティブなどの名前を付けて採りあげています。実は私は数学と統計学をベースにして、この分野で働いています。もう二十年程前から携わっていますから、この分野の成長と、そして世間の扱いの変化を見てきました。

新しい金融手段とその管理運営の方法が従来のものと比べて、少なくとも業務の形式上では革命的であるために、金融業務の大きな変化が世界規模で起きていると云う状況です。金融機関は昔から資金を調達し、資金の融通を行う（信用の供与とも言いますね）ことをその機能としてきました。この機能は変わる事はありませんが、機能を全うするための手段と範囲が大きく変化してきたということです。すでにお聞き及びの通りデリバティブの価格付けとか、ポートフォリオ作り・管理には、数学のような計量的方法が使われます。理論はかなり発展したのですが、実用面で言うと、デリバティブについては使い方のまずさ（悪用？）から来る失敗がマスコミで採りあげられるので、まだ世間には充分馴染んでいないように思われます。またマスコミ自身がよく理解できていない面もあります。

金融工学は新しいものではありますが、よくよく見ると、経済活動が世界規模になり金融業務の条件と環境が変化してきたので、従来の手法では不十分だということになった、それで新しい手法が開発された、と云うだけのことです。この新しいものを使いこなすには、使いこなせる人材を多く必要としますが、それと共に、制度の変更、経営組織の作り変え、意識の変革（先入観を洗い直す）など様々なことを伴います。日本国内では、金融機関の倒産あるいは合併などで大騒ぎをしていますが、体制が整ったときに金融工学的な新しい手法・技術の重要性が広く認識されるはずです。

専門大学院と高等教育体系の変革

新しい金融手段と計測・管理の方法は、デリバティブ開発やポートフォリオ作りに留まらず、企業財務・経理、証券化スキーム、など金融財務の全般にわたります。

さてこのような分野を大学院修士課程で専門的に勉強する場が今年からスタートしました。一橋大学大学院国際企業戦略研究科金融戦略コースというものです。私はこのコースのディレクターのような役割をしています。現在は一年生しかいませんが、二十六人いて、平均年齢が三十歳代前半です。出身大学は日本全国をカバーしています。授業は夕方からです。昼間に英語で授業を行う国際経営戦略コースと金融戦略コースを合わせて文部省の専門大学院第一号というわけです。文部省は古臭くて、余り良い印象を持っていなかったのですが、この研究科に対してはよく理解してくれました。

まだ大きな力にはなりませんが、重要な趣旨がこういう専門大学院にはあります。セカンド・チャレンジ（二回目の挑戦）です。十八歳で大学受験してそれで人生が決まるのではなくて、大学卒業・実務経験後にもう一度勉強・チャレンジの機会がある、と云う意味です。米国のビジネススクールに見られるように、ビジネス分野にも高度な専門教育が必要だというわけで、どの大学を卒業したかは関係なく、大学院修士課程レベルの教育体制を作ったわけです。このような大学院が普及するとどの企業に就職するかというよりもどういう仕事をするか、と云うことが第一義的になり、自分で企業を起こす人も多く出るでしょう。有名大学の名前を担ぐだけで仕事が出来るわけではなくて仕事をする個人の力と専門性が重視されると云う、言ってみればいまや当然のことですが、それが本当に社会に根付くようにと云う期待を込めています。さらに、高校までの強圧的なまた過熱した受験勉強が普通のきちんとした勉強になるようにと願っています。

世紀の節目に思うこと

山崎歌人協会　稲村幸子

二〇〇〇年から二〇〇一年へ、世紀の大きな節目である。〇とか一という数詞は何となくイメージを強く感じられるものである。今年は「山崎町文化協会」の機関誌『やまさき文化』も二十号となる。

扨て「山崎歌人協会」は、と数えると昭和七年「山崎歌話会」として創立発会以来、丁度七十周年に当たるのである。五十周年には記念に合同歌集『青山脈』を発行したが、残念ながら今回は見送りとなるので、せめてこの機に、山崎歌壇の萌芽期ともいうべき発足当時とその経歴を簡単に記して責を果たしたいと思う。

昭和初年、郷土の文学青年達が盛んに作歌活動をされていたグループがあり、その当時、山崎高等女学校に赴任されていた歌人安田青風氏を招請して、新しく結成されたのが「山崎歌話会」である。その頃、短歌結社水甕、高嶺、曼陀羅、吾妹、眞人等に所属していた短歌愛好者たちが参加して、会員二十七名の超結社の短歌会が新しく誕生したのである。若者の多い月並歌会は、青風氏を中心に論談百出、和やかな中にも活気があった。

昭和十三年、青風氏が大阪へ転居された後、戦争を挟む歳月の流れと共に、応召、転出、死亡等により人数は激減しながらも、灯火管制の下で身を寄せ合う様な例会が続けられた。終戦後は、復員や帰郷等による復帰、入会等もあり、徐々に復旧していった。故北林祐道氏、藤村省三氏らの参加を得たのもその頃である。

昭和五十年「山崎文化連盟」（文化協会）の創立と同時に「歌話会」も、文化活動の一部門として参加し、更に、藤村省三氏指導の「新樹会」、老人大学内の「かしわの短歌会」をも併合し、平成となって、「一葉短歌会」、「水甕山崎グループ」の参加をも得て総人数約八十名の「山崎歌人協会」となり、それぞれに月例歌会を催し、研鑽と親睦を深めている。

事務局は当初より「山崎歌話会」に置き、「宍粟郡歌人連盟」の事務局ともなっている。

昭和初年、郷土の先輩方によって蒔かれた一粒の種の芽生えが、地方歌壇の黎明期を形成し、脈々とその鼓動を打ち続けている事を思う時、「山崎文化」の一端を担うものとして、この歴史ある伝統文学の灯を消してはならないと沁々思うことである。

第二十二回春の芸能祭ご案内

日　時　平成十三年五月二十日（日）
午前十時から午後三時三十分まで

場　所　サンホールやまさき（山崎文化会館）

主　催　山崎町文化協会・山崎文化会館

後　援　神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、ご案内申しあげます。

参加部門　山崎詩舞道連盟　山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会　山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ　播州山崎太鼓
バンブー・ファイブ　山崎町老人大学

短歌

昭和八年十一月刊行
『山崎景物歌集』抄録　山崎歌話会蔵版

山崎歌人協会　稲村幸子

その一　最上山

ふりはへて今よぢ登る最上山朝ぎり深く鳥のこゑしきり　小針登良男

夜の鐘はいねよと鳴りて暁の鐘は起きよと人に呼ぶなり　加古　未囚

その二　藤の宮

住みつきていくとせならむ藤の宮藤の祭にまたあひにけり　安田　青風

セルの背の汗ばみしたし晝陽ざしここは花かげ紫のかげ　藤村ふくよ

その三　宍粟橋

橋杭のくろきに光る夕明り瀬音にまぎれなく河鹿あり　加古　未囚

連りて荷馬車行く橋の土ほこり河岸の木群へ吹きつくる見ゆ　小針登良男

その四　深淵

ひぐらしの声とほりきて静かなりこの山裾の大き青澱　大井　秀子

深淵に来て河原べのなでしこを友は手折りてわれに示しぬ　杉山　春逸

その五　荒神坂

埴尾坂祭礼の人の影絶えて店しまふ声うつろに聞ゆ　松本　冨治

窓ゆ見る荒神山は晝しづか遠き木群にかなかなの啼く　杉山　春逸

その六　螢狩

山崎の須賀の渡しに来ても見よほたるがともすネオンサインを　安田　青風

月よみはほのにあかるし宍粟橋に螢を見なむ妹ともなひて　前野　四郎

その七　盆踊

踊り子のはやし揃ひて踊りの輪くるりと廻るさうだろ踊　安井　俊二

わかものら血潮みなぎるこの宵をうたひ踊れよ山崎小唄　安田　章夫

その八　十二ン波

十二ン波と思ひ見てゐる川の面をしづかに下る筏ありけり　安田佐和乃

白き泡わきては消ゆる深流れ十二ン波を泳ぎくだりぬ　安田　章夫

その九　松茸狩

山の酒しみじみ思ふ焼きたての松茸さきてくみしその酒　大井　秀子

山崎町全景を眺め下しつつとりたての茸食ぶるうれしさ　前野　四郎

その十　郡是

幾百の乙女が手にて引かれゆく生糸うるはし郡是工場　後藤　市治

なみよろふ夕べの山に小霊して郡是製糸の笛鳴りわたる　安井　俊二

その十一

郡是製糸工場見学の歌並反歌　安田　青風

わが町の偽のうたびと　郡是の歌よむと来て　歌はよまず　ぜんざいを食ひしたたかに甘きに呆けて帰り来ぬ　われも亦　その一人なり　庭桐にひぐらし啼けど　窓にさす秋日は暑し　くるくるとまはる小車　索緒器に濁る操糸湯は　をとめらが　その眞玉手を　むらさきに膨れただらせ　額垂るる汗は膏は　眼にしめどぬぐふひまなし　げに父や見れば思はむ　げに　母や聞けば泣かむぞ　かくしつつ　花のをとめのとり立てし　糸はうるはし　つやつやと銀のごと　きらきらと金の如し　さるにても　このよき糸の　海とほくわたりてゆけば　メリケンの鵞女ら　靴下につくりはくちふ　あはれなる思ひぞするなる　そらみつ　日本少女が　手末の　たからの糸を　メリケンのあひる女が太脛に　はかしむといふ　そこ思へばなげかざらめや　ぜんざいの甘きに呆けて　帰り来し　偽の歌人　青風われも

反歌

やんきいのもだんがあるにはかしむる
くつしたの糸はやみにも光る

千早振る神のみすへのをとめらがつくらしし絹ぞつつしみてはけ

これらの歌は、おほよそ安易な気分で作られたものが多い。歌会といふものは元来作歌の技法を修練する一の機会であるが、歌会の歌、特に題詠の歌に命ある作を求めることは、通常の場合、無理とされてゐるやうである。随って本集に収録した作品の如く、その大部分が題詠であって（中略）すでに作歌の動機が、幾分餘興的であったのだから、本集の芸術的價値は、各作者の個性的な作品よりはよほど低下したものとなってゐるであらう。それでもよいのである。これは、謂はば、私達が自らの郷土に贈る愛らしい一把の花束なのだから。

竹林荘に於て　安田　青風

この秋、昭和初期の播磨文学活動調査のため「姫路文学館」より四名の方々の来訪を受け、ご質問に応えさせて頂いた。その時、資料として書棚の奥から探し出したものの一つが見出しの歌集である。

作者の方々の遠き日の面影を偲びつつなつかしく口遊むのは私の郷愁であるが古き時代の生き残りの一人として、現代の新しい短歌愛好者の方々にもご一読願

いたく、その一部分を抄録させて頂いた。
三時間余りの収録を終えてお帰りの客を見送るわが門辺に銀木犀が高貴な香りを漂わせていた。（稲村　記）

各地短歌祭入賞入選作品

（平成十二年度）

◇第十九回宍粟郡民短歌祭

（八月二十七日・農村センターやすとみ）

・兵庫県知事賞

指に伝ふ陶土の厚さ計りつつ盲ひのわれは轆轤を回す　森谷　康弘

・神戸新聞社賞

たそがれの散歩は小さき吾の旅みやげにつくし一握り摘む　小林　郁子

・安富町文化協会賞

背伸びしてやっとポストへ投れし児の書きし便りは誰が読むならむ　山本　正子

・宍粟郡歌人連盟賞

草刈機止めて憩えば刈りあとに神のごとくに鷺の降りたつ　南　裕之

巡りくる季を待つより去る日日を惜しむ手をもてカレンダー剥ぐ　嶋田　純孝

若さとはそつけなきかやみどり児を茶髪の父親物のごと抱く　安東はつ子

高枝に結はふる傘のかげに入り庭師は松のみどり揉みそむ　伊東まさ子

◇第十二回兵庫のまつり　ふれあいの祭典二〇〇〇

（十月二十九日・出石町農村センター）

・ふれあいの祭典実行委員会会長賞

あめんぼのすいとゆきしを目にとめて朝の植田の水口開く　嶋田　純孝

・佳作

筬欄間に眼をば遊ばせわが歌の意図とずれゆく評を聞きをり　安政　嘉子

◇平成十二年度西播磨短歌祭

（十一月十三日・西播磨文化会館）

・西播磨文化会館長賞

干瓢の白きすだれに遮られ麦藁とんぼ引き返したり　嶋田　純孝

・新宮町長賞

視力なきたがひの背なをながし合ひ初めて知りぬ友の体格　森谷　康弘

・兵庫県芸術文化協会賞

傾きし積木に触るる思ひして湯浴みの舅をタオルに包む　安東はつ子

・奨励賞

米政策に逆らふごとく今年また揃ふ稲穂が重々と垂る　北　隆治

・佳作

病む馬の心細きか顔を出し鼻なでさせる常なつかぬに　新井　慶子

子育ての喜憂を知らず生きて居て介護のお襁褓朝夜洗ふ　山科　重子

最上山公園　文化のこみち

歌碑（うたのいしぶみ）

。時報五時のサイレン長く尾を曳きて山の囲める町暮れかかる　青柳りやう

。けものらも染まりてあらむ並みよろふ尾根を焦がしてながき夕映え　名賀　常盤

。自負もろく崩れゆく日よしろじろと葉裏を見せて樹樹鳴りやまず　山崎　智絵

。音して落葉音無く落葉とよみ給ふ散策の道もみぢ極る　山本　千代

。一人来て山の焚火に手をかざす人界になき山のぬくもり　北　隆治

。山峡に積まれし廃車風葬を思はせて風に光る窓あり　森本萬千子

。穂すすきのそよろそよろと揺れながら憂世の風に絮を放ちぬ　栗山　節子

。拾はねば拾ふ者なき独り居の床に散りたる百合の一片　冨和　和子

。沒りつ陽に山茶花の紅透くほどに明るさ及ぶ庭のひととき　本條　邦子

。蒔きどきは柿の芽吹きと教はりき午蒡まきつつ姑を想ふも　横野　光子

。われ似とふ孫の寝姿まねて眠るかすかな息に息を合はせて　竹田　長司

「北川智恵様を偲ぶ」

山崎歌話会　霜月歌会

平成十二年十一月七日

。靖国の妻とし遺児の母として詠ましし みうた殊にかがよふ　稲村　幸子

。君の歌集『小春日』のごと空澄みていまみひつぎの光りつつ発つ　森本萬千子

。三百年の庭梅咲くと年年に春さきがけて詠ましものを　山崎　智絵

。耳遠くなりしと柩抜け出でて弔辞聴きますやうなうつしゑ　栗山　節子

。新しき出合ひ少なきひとり身に古き知人が一人また逝く　北　隆治

。天性の智恵と明るさ惜しみなく人ら導き君生きましき　安東はつ子

。お優しき面影たちて涙ぐむ我が果つる日もいよよ近づく　青柳りやう

。小春日の広縁側のぬくときにやすらひし吾が刻を忘れず　藤原　すみ

。山裾の友の通夜果て帰る道黒きけものも秘かにゆきぬ　嶋田　純孝

俳句

日生頭島吟行

平成十二年四月十六日、午前九時、青嶺句会一行十四名は〝太陽と海と緑のまち〟日生へ向って山陽道をバスに揺られていた。

心配していた前日の雨も上り、街道は桜の花が満開、又山肌を紫色の可憐なつつじが色映えている。

故　和田疎人先生の俳句

・咲き満ちてさゆらぎも無き大桜

山崎俳句協会

青脈句会　**鳥　羽　チエノ**

日生諸島は、潮干狩、海水浴、みかん狩りと四季を通じて多彩で、風光明媚な瀬戸内国立公園である。

日生港より定期船に乗り、小島頭島へ向う。

内海は凪で揺れも無い。

・春愁のごと昃（ひかげ）れる瀬戸の海　千　代

・花冷えをかこち合ひつつ渡船待つ　泊　水

・さみどりの小島に通ふ定期船　光　子

・春霞沖の小島も小船にも　薫　風

約二十分で船は頭島へ到着。曇天ではあったが、軽い足どりで一行は波止へ上陸、港を一望しながらゆっくりと民宿花房へ向かう。

・ひしめきし漁船を波止に島おぼろ　君　子

・艀妻波止に物干す初燕　光　栄

・蛸壷の積まるる港花曇り　チエノ

・夏近し水にたゆたふかき筏　栄　子

・手を振りて行き交ふ船や瀬戸のどか　とみ代

・花曇り漁船水脈引き戻り来る　美保子

もうすでに、今日の漁を終えたのであろうか、船溜りには舫い船がひしめきあっていた。

・浜うららぎ背山は百花波きらら　ゆ　き

・島と島百花みだれて瀬戸の春　良　子

・吟行の花の万朶に心足る　千　里

・島人の小さな世界さくら咲く　八　重

民宿では、海の幸のめばる、蝦蛄、海老等々おいしい御馳走に歓声をあげる。

席題の締め切りは十二時三十分、しばし静かに句作の態勢となる。

投句披講緊張の時が過ぎ、無事吟行を終える。

日生〝五味の市〟へ立ち寄り、思い思いの土産物を手にして、楽しかった一日に感謝し帰途に着いた。

山脈句会詠草

一献を重ねたる色酔芙蓉　高野　薫風

雨の輪を池に集めて杜若　伊藤　紫明

浮き雲の結びては解け茸山　宇野　幸子

きゅっと尻曲げてゐたりし秋なすび　福田　祥栄

酔芙蓉散りてなごりの紅の球　前野　房子

水澄みて流れに泳ぐ魚の影　小倉　恒子

稲光雲の悪相見てしまふ　畑林　和枝

木や空に秋迷ひなき過疎の里　竹内　益江

花嫁の無垢の姿や花芙蓉　尾崎イツエ

一言のいたはり嬉し秋の夜　牲川　信子

さわやかに余生句の道歩みたし　田中八重子

畷（なはて）道行けども行けど曼珠沙華　浅田　蕪耕

拝殿に村人しばしの端居かな　池田　陶瓦

山裾へひろがる棚田露光る　田中　惠

風誘ひ風と遊べる猫じゃらし　岩前多輝子

爽かや病の癒えし句座の端　岡田　瑞穂

筆談の涼しく交す異邦人　横江　伯峰

さわらび句会

雪蹴って翔つ鶺鴒や川の中　山岸その子

しなやかに白糸草の風を縫ひ　藤井　七代

古き家をまもるも運命さるすべり　小林　紫生

炎天の匂ひまとひて児等来たり　川崎　栄子
たちまちに汗の子となり三輪車　本條　淑子
四万十の川面色濃く蜻蛉(あきつ)群れ　庄　昌子
鈴虫の高き音色に夜のとばり　山中　正子
秋の蝶梢越ゆ力まだ秘めて　壷阪加代子
小鳥来て老い母自在二十四時　薄木満寿恵

青嶺句会詠草

五、六歩の木橋に名あり犬ふぐり　芦田　八重
山里の音なく更けて銀河濃し　秋久　光子
家々に橋ある里や後の月　石野　光栄
寒木瓜や言ひたき事のまだ言へず　岸野　昭三
芽柳の風に靡きてさからはず　小畑　ぬい
薬のむ寒九の水を取りおいて　高野　薫風
八十路てふ命賜はり初詣　下村　君子
寒風にさらされ素麺白さ増す　杉山美保子
寒稽古少年の声澄み切って　田中　良子
たぎつ瀬のしぶきに光り柳の芽　鳥羽チェノ
来ればすぐ入る親しさ春炬燵　永井とみ代
更衣へて八十路の命いつくしむ　秦　千里
汲まず井は塞がれ十薬咲くばかり　藤家　千代
芽柳を跳ねて水車の機嫌かな　山田　東軒
幸せは今かも知れず春炬燵　山口　栄子
寒行の僧の素足の真赤なる　和田千代子
寂聴の源氏にひたり春炬燵　三浦　ゆき
芽柳や疎水豊かに渦を生む　福田　泊水

自句自解

青嶺句会　福田　泊水

私が投句している俳誌九年母（五十嵐播水先生主宰）に自句自解欄があります。これは先生が選句された中で特に気に止められた句を作者に自句自解を要請されるのです。私が自句自解を求められた句を紹介します。

平成三年三月号

聞き捨てにならぬ話にマスクとる　泊水

これはあるテレビドラマを見ていて出来た句である。ドラマの一シーンで四、五人が激論を交わしていたがその中の一人が相手を侮辱する一言を云った。侮辱された相手は掛けていたマスクをさっとり「何んだって、聞き捨てならぬもう一度云ってみろ」と激しい口論となった。

平成三年十一月号

大胆に女も罵声水喧嘩　泊水

私には水喧嘩の体験はないが、子供の頃村の長老に聞いたのを句にしたものである。昔は水の調整出来るダム等なく水田の水は専ら河川や貯池に頼っていた為日照りが長く続くと深刻な水不足となり、部落と部落との間で水の奪い合いとなり、部落総出の水喧嘩となった。勿論女もなり振りかまわず大声で罵り合ったようである。

平成四年八月号

大胆に値切るは女苗木市　泊水

春めいたある日近くで苗木市があった。私も一寸覗いてみようと出かけてみた。いろいろな苗木と人出で広い会場も一杯であった。それぞれが好な苗木に見入ったり、買ふ人も値切る人値切らぬ人と様々であったが、中でも中年の女の人は強引に値切っていた。少しでも安く買いたいのは人間の心理ではあるが女の人は大胆だなあと思った。

平成八年十二月号

傷心の吾に一途に虫鳴ける　泊水

家内の行きつけの美容院店主は仲々の手腕家で他市にも店を出し盛大に営業していた。その店主に頼まれて連帯保証人に捺印したところが、一年余して破産行方不明となり負債を背負う破目になった。信用していた人に裏切られ、また自分の軽率さを悔やみ眠れぬ夜もあったが、虫だけは澄んだ音で一途に鳴き私の心の傷を癒し慰めて呉れた。

平成十年九月号

吹き抜ける風に香のある新茶揉む　泊水

私の通っていた小学校は田舎の学校で、毎年初夏には茶摘み遠足があり生徒が摘んで来た新茶を校庭に筵を敷いて、学校で使用する一年間のお茶を先生の指導下、生徒が馴れぬ手付きで新茶の香に包まれつゝ賑々しく製茶した。折しも校庭を吹き抜ける香しい風で新茶を揉む手も弾んだ。

千万（ちよろず）の

山崎町合唱連盟
藤井七代

先般十一月八日山崎町戦没者追悼式が厳粛に挙行されました。町民合唱は左記の歌と共に参拝参加させて頂きました。

戦没者にささぐ
「千万（ちよろず）の」
大谷嬉子　作詩
清水脩　作曲

千万の　いのちの上に築かれし
たひらけき世を　生くるかなしさ
思ひ出は　いやあらたなり
苔のみどりは　ふかみゆけども

「戦没者にささぐ」との副題があり遺族のひとりとして詠まれた歌です。本来は長歌と短歌の対のかたちをとられています。最愛の弟を沖縄で亡くされた詠人が戦後現地の地下壕を尋ねられ、その悲しみを歌に託されました。今、私達はその時代とは比べようのない幸せな時代に生きています。しかし一般人も含めた数多くの戦争犠牲者の尊い生命の上に今日の平和が築かれていることを、ともすれば忘れがちなのではないでしょうか。

昭和を代表する作曲家清水脩は印度の古典リズムを基調として東洋風の旋律を用いたドラマティックな作曲法で厳しくもかなしい心情をうたわせています。

昭和二十八年に作曲され、同年四月修された戦没者追悼音楽式典にて新曲として発表されました。

式典への参加のお話を耳にしました時戦後五十有余年となりご遺族である親御様方も少なくなられたのだろうな！と思われたり致しました。

曲は「千万の」を是非にと思いました。平日でもあり合唱人数は更に減り小数精鋭、背水の陣を敷くの心境で臨むことになりました。この曲の奥深い内容が、うまく表現できるのか？ご指導の先生の下理解を深めつつ練習を重ねました。

読めば大意がご理解下さるとの思いで社協事務局のご好意にて歌詞もプリントされました。当日、団員緊張と感激をもって歌いあげることができたのではないかと思っております。

今回、戦没者追悼式に合唱の栄を賜わりましたこと、山崎町当局、社会福祉協議会、遺族会のご関係皆々様に心よりの御礼を申しあげます。

音水国有林での植物観察会

植物同好会　久宗丑雄

今日は十一月十一日(土)波賀町音水国有林での第百三十一回植物同好会観察会の日で、毎月一回、宍粟郡内で植物観察会を実施しています。

毎回のように午前八時半、山崎小学校前に集合します。今朝も大阪市より中国道を自家用車で三時間余りかかったと言われる男子会員、毎回必ず参加されます。遠きは神戸、姫路、竜野、新宮方面よりの多数の参加者の顔を拝見しました。

植物同好会員は百五十名程度ですが、毎回四、五十名の会員が参加します。

今回も二十台程の乗用車に乗り合わせ波賀町野尻付近より引原川ぞいの紅葉した美しいモミジを眺めながら、山崎を出発後二時間程で、目的地の音水国有林のブナ、カエデ、トチ等の自生する自然林に到着。林道わきに設けられた駐車場に車を止め、全員揃って、いつものように記念写真を撮影する。

はじめに今日の講師である内海功一先生より、特別に残された数十町歩の広大なる天然林の説明や観察すべき要点等の指導を受け、自然林の中に四、五年前に特別に設置された歩道を講師さんの説明を聞きながら一時間程山奥へ進みました。

特別に残された数十町歩の天然林は自然林として杉、桧は一本も植林されず、落葉樹であるトチノキ、ハウチワカエデ、コミネカエデ、オオイタヤメイゲツ等の巨大なる落葉樹が群生し、地表には一米程の丈の短いチャボガヤ、ヤマアジサイ、ヤネフキザサ、しだ類のサカゲイノデ、ヤマイタチシダ、リョウメンシダが群生していました。

参加された植物同好会員も、日常体験できない秋の大自然に接して、満足していただいたものと信じます。

午前十二時前に昼食の弁当を食べ現地解散しました。

ゴッホと絵

山崎美術協会
福岡久藏

ゴッホが若い時は美術商や画廊で働いたり、語学を教えたり、説教師をしたりしていました。そして、二十七才になって画家になる決心をしたといわれています。自殺をしたのが三十七歳ですので、画家としてはわずか十年足らずです。それでいて、約千点の緻密な素描と九百点近い伸びのびとしたタッチの油彩画を残しています。いかに生真面目なゴッホとはいえ、一年に二百点の作品とは超人的です。それも全てが後世に残る絵なのですから、スゴイ！の一語に尽きます。

昨春、オランダへ行った時、ゴッホ美術館へ立ち寄りました。そこには沢山の絵が所狭しと並べてありました。その中に自画像の小品が透明なパネルに掛けてあり、裏にまわって見るとキャンバスの裏にも自画像が描かれているのです。彼はモデルを雇う金がなかったから自画像を描いたとか、キャンバスが買えなかったから裏に描いたとか言われています。確かに彼の生涯で絵が売れたのは、たった一枚といいますから生活が苦しかったのは事実でしょう。しかし、本当はモデルやキャンバスを用意するいとまさえ惜しんで制作に打ち込んだのではないかと私は思います。

ゴッホは晩年、相次ぐ発作に苦しめられ、アルル近くのサン・レミ療養所に入院していましたが、そこでも創作意欲は衰えることがなかったといいます。彼の晩年の作品はこだわりのない明るい作品ですので私は大変好きです。昨秋、南フランスへ行った時、サン・レミ療養所へ立ち寄ることができ、心躍る思いで行ったのですが、西洋特有の幾何学的な円形や方形の庭と単調な建物が立っているに過ぎないのには驚きもし、唖然とさせられました。

しかし、考えてみると彼の代表作「ひまわり」や「糸杉」なども身近なんでもない題材ですし、「はね橋」にしても田園風景の一こまに過ぎません。つまり彼は日頃からよく見慣れている身近な静物や風景にも感動し、そして彼独特の造形力であのすばらしい絵に仕上げるのだと教えられた思いがしました。

私たちは日々の慌ただしさに振りまわされ、自然の移ろいや小動物の動きに驚いたり感動したりすることが少なくなり冷めた心、そして顔、そんな過し方をしているのではないかと反省しきり。

私の随想

山崎郷土研究会
志水美好

山崎郷土研究会では、会報部・研修部・史跡部を中心として会を運営して来た。研修部では普通の観光でなく歴史探訪的な旅行を続けて来たが、会員の高齢化と他団体の旅行が多くなった事で、年二回の研修旅行が参加者が減り赤字で困る事がおきている。史跡部では町内の史跡の案内と解説を刻した石の標柱を四十数基建てたが、会員減による会計不如意で今年度は建てない事になった。会報部では春秋二回無償配布して来た会報も印刷費が高くなり継続が苦しくなっている。戦前より五十年以上も続いている会報は郷土研究会の誇りであり、何とか続けたいと一同願っている。

歴史ブームと言うか各町でも歴史や文化財を重視している。一宮町では、中山一号墳の発掘が終り、家原遺跡公園の整備が進められている。十二戸の古代住居の復元に続いて、明治中期の役場建物を復元し歴史資料館として公開している。又温泉も掘削中である。波賀町では、波賀城跡を整備して小天守閣も新築されている。千種町では、天児屋鉄山跡を整備してたたら公園を造り学習館も完成した。安富町では、塩野六角古墳を発掘復元して遺跡公園が完成した。尚千年家付近も公園にする計画である。三日月町でも乃井野陣屋跡が公園として整備された。新宮町でも、風土記の記念碑を中心とした小公園が二か所に完成し、国指定史跡の宮内遺跡を遺跡公園にすべく準備中である。道の駅や図書館ではテーマ毎の文化財の展示が年数回行われている。又公民館活動の「新宮ふるさと講座」も三年目を迎え七十名余が受講している。上郡町の井の端遺跡公園、赤穂市の有年原田中遺跡公園や沖田遺跡公園も出来て既に久しくなる。相生市の羅漢の里も立派になった。他町の勝れた施策は山崎町でも見倣って実現してほしいと思う。

山崎町教委で「ふるさとかるた」や「ふるさとすごろく」を作ったのを好機に、山崎老人大学に歴史探訪部が出来て、町内だけでなく広く県内を探訪する専門講座が十余年も続いている。図書館主催の「山崎町昔ものがたり」に歴史に関心のある大勢の方が参加された。昨年春淡路地方史研究会四十名余の山崎来訪を受けた。あれこれ考えると郡文化協会が「しそうの文化財」を作られた機縁に、文化協会と郷土研究会が共同して歴史探訪やふるさと講座を計画してほしいと思っています。

ストレスと川柳

山崎将棋同好会
山田 榮三（酔仙）

山崎将棋同好会に所属している私は、将棋・囲碁等勝ち負けを争うゲームが好きで、特に将棋はよく指しました。

勝てば「すかっ」とするし、負ければ「何くそ」という気持ちで戦いストレスを溜めたり発散したものです。

加齢と共に、自分だけで気分がすっきりする方法として川柳を始めました。

すこし前から記録していたノートを整理し乍ら次々と作っていくうち、自分だけでなく他の人に見て貰い、評価したり、笑って貰えないかと思い作品集をにしし ん本店・山崎郵便局に置き、「あまから川柳かわやなぎ」と表示し神戸新聞にも何回か掲載されました。

現在句数も二千を超え、六百句を一冊にした本も三冊目を配布しています。

元来人間は、本音で話し合い行動したいと思っています。しかし我々凡人には自尊心というものがありそれを傷付けあっていては世の中うまく行きません。

ずばり本音で言われるより、建前での「おべんちゃら」を聞く方が気分が良くなるように思います。

川柳は、ずばり本音を言っても怒る人はそんなに居ないし、笑って許してしまう。

次に私の作品を抜粋し、紹介致します。

◎新郎も　あきれる程の　美辞麗句
◎音痴でも　他人の下手は　よく分かる
◎寺の寄附　檀家次第で　家も建ち
◎甲斐性は　有れば有ったで　嫁が泣き
◎陰口を　姑の前で　子が喋る
◎先生より　老けたのも居る　クラス会
◎気が付けば　親が作った　どら息子
◎お歳暮は　義理と感謝と　下心
◎被爆国　核持つ国に　守られる
◎似合います　眼鏡売り場は　笑顔添え
◎達筆と　言われる人の　字は読めぬ
◎へぼ将棋　横からへぼが　口を出し
◎医療ミス　無いが真の　名医なり
◎親孝行　介護保険が　代行し

川柳の巨匠尾藤三柳先生は、川柳とは横の詩である、と言われます。

旅行先で絶景に出会った時とか、新聞記事やテレビを見て感動したり、怒ったり、笑ったりすることが有ります。

誰でも言いたいと思い乍ら、なかなか言えないでいる事を、端的に五、七、五で代弁し、そうなんだ！それが言いたかったんだ！という共感を多くの人から引き出すからです。

川柳でストレスを解消しましょう!!

打てば響く心のふれあいを

播州山崎太鼓
久保 孝

山崎町、この町が自然に囲まれた美しい城下町だと思われる人がどれくらいおられるでしょうか。兵庫県は西播、姫路に少し足を伸ばせば行ける。また生活の手段でもあるということで大勢の人が地元山崎を離れ便利な地域へと流れる。目まぐるしく変化する生活リズムのなかでのんびりと心穏やかに過ごすことに焦りを感じ次第に生きていくうえで大切な心のふれあいがなくなっていくー温故知新という言葉がありますが今一度この言葉の意味の意味を思い出してみませんか？

「故き」を山崎に例え、故郷を大切にしてこそ新しい事へ挑戦することができるのでは…。人は誰にも親があり生まれ育った故郷がある。時の流れと共に乗り遅れないようにと急がねばならないことも確かにありますが人は支え合ってこそ成り立つものという気持ちを心に持つことができればもっと人間同士のつながりができ、心に素直さが生まれると思います。前置きが長くなりましたが今の状況を少しでも改善できればと太鼓のサークルを思いつきました。「打てば響くような心のふれあい」ができればと有志を募り地道に練習と努力を積み今年で七年目を迎えました。太鼓の音には心が見事に表れます。強い音、優しい音、打ち手の心意気ははっきりと聴く側の心のなかにも伝わります。人間だからこそ表現できる喜びを味わいそれを伝えたい。時には辛さのなかに居る時もあるでしょう。でもそれはそれでいいのだと思えるたくましさと優しさを感じることのできる情熱を太鼓に託して目下播州山崎太鼓の練習に精を出しています。地域でのイベント、結婚式の祝い太鼓等、舞台に立つことも増えてきました。これからも幅広く活動の場を広げたいと思います。また、共に太鼓を打つことの喜びを味わえるメンバーも募集しています。老若男女、年令は問いません。山崎文化のひとつ、そして播州山崎太鼓に是非ご参加を!!そして皆様の応援とご理解を頂ければ幸いです。

平成会紹介

平成会
中道忠志

平成元年に発足致しました平成会は、今年で十二年目を迎えています。発足当時十七、八名、平成四年二十名、五周年時二十八名、十周年から現在は、三十名の会員で構成されています。会の目的は、「地域社会の文化的諸問題を調査研究し、文化的発展に寄与する。」「会員相互の親睦を図り、相互の資質の向上を目指す。」とあります。発足当時は講師例会などが主でした。四年目から平成会農園にて、町内の保育、幼稚園児を招待し、又、平成会員家族達も参加して、自然や土に親しんで、収穫の喜びを経験してもらおうと、ジャガイモ掘りを例年の行事として行うようになりました。次に、地元八幡神社が盛り上がるように、と年末行事としてカウント・ダウンを行っています。各年毎に工夫を凝らし、良い事は継続するよう努めています。以上の二点が、今のところ毎年の行事として継続されています。

又、四年目ぐらいから、会長、副会長事務、会計を設け、会の運営が確立的なものとなりました。更に班制が敷かれ、四班が出来、各月ごとに、各班、持ち廻りで例会を遂行しています。四名の班長は、前記の役員に含まれます。講師例会は、できるだけ地域に関わりが有り、文化的な事が学べるよう努めています。

バブル崩壊後の不況の波、会員にも多少の影響があると思うのですが、費用の掛からない例会内容が次々と工夫を凝らし湧き出て来るのは、流石に年齢層が厚く、職種も多い人達の集まりだと、感心致しております。そして、会員家族間の親睦を図るため、家族例会、一年間のまとめの忘年会、新役員改選及び一年の始点である総会（新年例会）を毎年行っています。

会員の皆様は、年齢的に働き盛りで、忙しい事と思いますが、十二年度のスローガン「交流と親睦」又、会員相互の資質の向上を図るため、出席率百％を目指して欲しいと念じています。

尚、結成五周年、十周年を盛大に而も厳粛に挙行出来、成功裡に終了した事は、新潮会、昭和会、文化協会、及び諸先輩方の御指導の賜と感謝致しております。私共、平成会員は今後も前記の目的のため精進してまいります。

最後に、文化協会並びにご関連の皆様の更なる御発展と御活躍を祈念致しております。

文字のはなし

山崎詩舞道連盟
小川　登

孫悟空の御師三蔵法師が、印度から経文を持ち帰られた時は、六五七部の経文全部が、紙に書かれていたのでは無く、竹帛と言って、竹に書かれていたものが多かったので、三蔵法師は何時も大きな荷物を背負った絵が書かれている。三蔵はこの経文を太宗皇帝に献上されました。

三蔵法師玄奘以前の経文全部と、玄奘の持ち帰った経文を比較すると、玄奘以前の経文の方が多かったので、玄奘以前を旧訳と言い以後を新訳と言うのである。玄奘三蔵法師は経文以外に悉雲語（サンスクリット語）等、色んな文物を持ち帰られた。文字や文物の歴史に、宗教の及ぼす影響は極めて大きいのである。

日本の文字は、応神天皇の時代に百済から王仁が、千字文や論語を携えて来たのが始まりである。平假名は弘法大師の発明である。いろは四十八字よりなる歌である。片假名、五十音字は、吉備真備の作等と言われているがそうでは無い。片假名の配列は「悉雲」（しったん）サンスクリット語が語源である。これも経文の解釈と共に伝えられたものであるから、天台宗の僧達が伝えたものと考えられる。何れも起源は佛教にあり、僧侶にあります。

假名では万葉假名が最も古いが、これは漢字の音の似たものを夫々に配して、草書化したものである。平假名も漢字を草書化し、更に簡略化したものである。片假名は、漢字の偏、又は字画の一部を取って、音を表したものである。假名は日本語の表音文字であるが、亢々が、漢字の変化したものであるから、多少の混雑は避けられ無かった。それが現在のように統一されたのは、明治三十三年の小学校令改正の際に成されたのである。

漢字は中国、韓国、日本等で使われているが、必ずしも、用語の意味は同じではない。「簡單」と言う字は、三國共、読み（発音）も意味も同じである。品物を送る場合、「送付」と言うのは中国では持ってついて来る事、輸送する事は、「託送」と言います。「城」と言うのは、日本では戦争の為の建造物、砦、塁の事であるが、中国では「都邑」市町の事である。従って、城外と言うのは郊外の事である。金州城外、姑蘇城外のように使用する。乃木将軍は日清、日露の両役に従軍しておられるので、中国語にも能く通じておられ、中国流に使っておられる。中国語を知らない漢詩人が、金州城下の作などと書くのは、大間違いである。

昭和会より

昭和会
安井克典

昭和三十二年四月に発会してから今年平成十二年四月で満四十四年を経過いたしました。その四十四代目の会長を命じられました。昭和会の会長は一年交替でその一年は自分の思うままに全力投球をしなさいと言うことになっております。会員の数は三十名前後ですので殆どの会員が会長経験済みで私も二回目であります。

昭和会は幼馴染みが故郷で生活する事になり、その交流の中で生まれたもので、社会的活動とか文化的活動を意識したものではなく、自然発生的に結成されたものです。人はやはり一人で歩くよりは、大勢の友と一緒に歩く方が良い様です。昭和会のお陰で勇気づけられ、助けられ、楽しい時間をつくることが出来たか、一人で出来ないことがどれだけ数多くやられたことか、昭和会に感謝する此頃であります。

当時の若者達も会の歴史と共に老境の入口に差しかかってまいりました。今後昭和会をどんな団体に育てるのか。会員はこれからどんな行動をしてゆくのか、考えてゆかねばならない峠にさしかかっております。

それにしても昨今の世相の変化は著しく、犯罪の低年齢化、良い事、悪い事の判断基準の混乱等心配で一杯であります。

私の同世代は、敗戦によって価値観の逆転に遭遇しております。その後アメリカの手で進められた諸々の政策、特に3S政策、スポーツ、セックス、スクリーンのSで始まる楽しい事など、そしてそれを手に入れるための経済成長への没入、誠に乱暴な言い訳ですが、敗戦直後の日本に投入された日本軟弱化政策が五十有余年を経た今日花開いたのではないでしょうか。本当に昨今の世相には異常なものを感じます。これを少しでも正すのは至難のことと思いますが、親のそして、世の大人達の責任であります。でこれからどうすれば良いのか、私達の毎日の言動を正しくすることが肝要と考えます。

最後にこれからの指針としていただきたい言葉を献じて駄文の締め括りにいたします。

その時、イエスは言われた「父よ　彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのかわからずにいるのです。」

ルカ伝三十四章

「法に則り　譬喩を用い　因縁を語る可し」

日蓮上人

やまさきミレニアムフェスティバルに参加して

山崎郷土芸能保存会　志水正信

宇原の獅子舞は特に梯子獅子に特徴があり、町の無形民俗文化財に指定されていますが、山崎町全体を対象としたイベントに出演するのは、第一回の山崎まつり以来、十八年振りだと思います。

特に今回は二十一世紀の幕あけの一月元旦に出演出来、且つ皆様の大変な応援を得ました事を感謝いたします。

宇原岩田神社獅子舞について

一、毛獅子である

毛は馬のタテガミを編んで木綿の布に縫いつけてある。雄、雌、二頭あるが、「面相」も「毛の色」も違う。

頭は「木の骨組み」に「はりこ」で出来て居り、うるし塗りの上に金箔がほどこされており、重さは三・五kg程ある。

雄の方は八年前、雌の方は昨年大修理をしたので、見た目は金ピカですが、しかし骨格は二百年前のそのままです。

二、演　目

神楽、曲舞、相之山、ぼたん、刀、棒、蝶子、吉野、岡崎、梯子、道引、等があります。

このうち梯子獅子は代表的な演目です。長さ六mの梯子を二本組み合せ、急峻な山に見たてています。そして、二匹の猿にあやつられた獅子が恐る恐る山に登って行き、やがて頂上に達し、歓喜の神楽を舞います。

児童合唱団の思いで

山崎児童合唱団
山崎小学校六年
塚田　ゆき奈

私は二年生の時から入りました。たくさんの思い出があるけれど、特に印象に残っているのはアメリカに行った事です。飛行機に乗って十四時間、長い時間をかけてシアトル空港に着きました。まず私達が向かった先がスクイム市です。そこは、田畑がいっぱい見られ、いなかの町でした。その次の日、私達はある小学校へ行った。私達の演奏が終わるとたくさんの拍手をもらいました。私は音楽は言葉が通じなくても世界の人々に通じるものだと感激しました。それが終わると私達は学校の中を案内していただきました。それからお昼は、学校の給食を食べさせていただきました。小さな体育館みたいになっていて、そこで食べられるようになっていて、ほとんどセルフサービスになっていました。日本とは少しちがい、好きな物を好きな量だけ食べられて、きらいな物は食べなくていいし、どれだけ残してもいいのだと聞かされ、いいんだなと思い、少し不思議にも思いました。

そのほかにもたくさん旅行に行きました。劇団四季の「美女と野獣」を見に行ったり、合唱団出身の美鳳あやさんの舞台を見に宝塚に行ったりもしました。そのほか、淡路花博に「ポンタとキタキツネ」をするために朝早くから行きました。しかし、早朝だったためお客さんは少なくそのうえ、雨が降っていたので残念でした。

合唱団に入っての一番の思い出は、定期演奏会です。二年生の時から劇をずっとやってきたけれどセリフもあまりないし学年が幼い時は、たいくつしたりする時も何度もありました。今年は、六年生なのでたくさんのセリフ、動作があり練習も大変です。メーテルリンクの青い鳥をします。十六人というとても少ない人数ですが、みんながんばっています。ぜひたくさんの方に見ていただきたいです。

私が卒団してからも、もっとたくさん入団してくれて、大人数の合唱団になったらいいなと思います。

茶華との出会い

山崎茶華道協会
梶浦　美智子

山崎茶華道協会の年中行事として五月にさつき祭り協賛茶会を、夢公園で野外に茶席を設けました。みなさんに気楽にお茶を楽しんでいただきました。又九月チャリティ観月茶会は、防災センター日本間で、琴泉菖蒲会、竹壮会の方に御協力頂き、違った雰囲気で、大勢の御来場をいただき、売上金の一部を、福祉協会に寄贈しました。十一月の文化祭では茶席華席を、防災センター五階で、盛大に行いました。

城下のふれあい祭り七回を迎え、茶席体験学習コーナーで真剣に、小中学生が茶筅をふっている姿に感銘と喜びを感じました。

私の趣味の一つとして始めた生け花が人生の大きな生きがいとなりました。

良き親先生に恵まれ、多くの友に支えられ、家族の協力があって今日の私があります。

花の自然らしさを器と共に表現する、その深さを生けることの難しさ、生ける花から遊離した素材が意外なもの同士つながるミスマッチの面白さ、その表現に戸惑いながらも新しい発見に目を見張り、今まで見た事のない花、新しい輸入花へと、心の広がりを覚えます。

昨年の夏、家元青桐会の同期グループで、北アルプス白馬、八方尾根周辺に、花と自然を求めての旅をしました。姫路を夜出発し、早朝に到着しました。手のとどきそうな大きな星、ダイヤモンドをちりばめたような美しさでした。目を閉じると、空から虹の花びらが、ほろほろ舞いながら、大きな水の器に、すい込まれていくようでした。最後の日、眼前に広がる雪景色、雪渓を通り抜ける風、汗だくの体に、心地良く感じ、疲れも吹き飛びました。北アルプスの大自然という大きな心の器に、たくさんの草花を生ける、大変有意義な楽しい花との対話の旅でした。

色々な茶席や華展に参加させていただき、多くを経験する事が出来ます。

花に対してもより深く、話しかけて知恵をしぼり、表現する喜びを味わう事が出来ます。自分自身を高める事が出来ます。

これからも生け花と、お茶は、私の生涯学習だと、心新たに精進して参りたいと思います。

合掌

謡曲の想い出

山崎謡曲同好会
福井浩道

謡曲を始めた切っ掛けは、同窓会の席で、今は亡き友、言葉に障害をもった彼が、猩々「老いせぬや。薬の名をも菊の水。盃も浮かみ出でて友に逢うぞ嬉しき」と謡った。驚くとともに謡曲とは、こんなに良いものか、と感銘。同席していた親友二人に話をしたところ意気投合、早速先生にお願いすることになった。

自宅で翌月から友達と練習開始、思っていた小謡、拍合ではなく、不合、鶴亀「それ青陽の春になれば。四季の節会の事始め……」全然面白くない。しまった。教えてもらうのじゃなかったと、後悔しきり。しかし先生にお願いしたからには習うしかない、とお互いを励ましながらも興味沸かず、練習も一週間一回当日のみ、このような状態で何年か過ぎた。今顧みると、先生の方が大変だったと申し訳なく思っている。

ある日、テレビで〝能〟土蜘蛛の放映があり鑑賞、なんと素晴らしい、と思うと同時に感激した。よしやろうと心に言いきかせ練習を始めた。やっと謡いが面白くなりかけたとき、仕舞いの練習をと言われ、今度は舞う謡いを覚えなければならず、また苦になった。友達も少しずつ謡いが難しくなってきたためか二人とも辞めてしまった。私も仕事の関係もあっり、後を追うように辞めた。過ぎること十二年、辞めていた友達二人が、最近他の同級生の勧めで、別の先生に習っているとのこと、同級生一緒に習おう、と声をかけてくれた。習いたい気持ちはあったが、新しい先生に教えていただくのは、どうか思案した。考えが古いかもしれないが、どちらも行けないと判断し、友達にはいいように返事をした。一年が過ぎた。また友達から話があった。いろいろと考えた結果、一切の事を忘れあたらしい先生に教えていただくことにした。素謡いのみであるが、熱心に教えて下さる事もあり、歴史と物語りが少しずつではあるが解り、習うことが楽しくなった。これからも続けて行きたいと思っている今日この頃である。

写真は宇田唱謡会の練習

山崎小学校のタイムカプセル

新潮会　山本喜教

昭和五十九年四月着任後間もないある日沿革史を見ていると、本年（昭和五十九年度）は、学校創立百十年の記念に当る年であることを知りました。

普通は十年か二十年毎の区切りの良い年を選んで考えることが多い。

百十年と云う年は必ずしもベターではない、しかし、記念日を機会に行事を考えて山崎小学校の古い歴史と輝かしい伝統を知らせるには最高の機会と思い、取敢えずＰＴＡの皆さんに相談することとしました。

記念行事としては、運動場整備・図書館の移動・体育館問題・校門付近の整備等々いろいろ考えられましたが、しかし行政との関わりが多く本年度（昭和五十九年度）の行事に取り上げるのは時間的にも無理な状態でありました。

そこで、教育的にも意義があり、児童にも興味があって具体的に取り組める事はないものかと、いろいろ考えられた結果、町の現状や、各家庭の様子、商店街の様子などを記録した物、写真その他、児童の思い思いの作品や、教師・一般の大人の方達にも参加していただいて、封入し、中庭にタイムカプセルを埋める事を決めました。

このタイムカプセルの開封の日は、「二〇〇一年一月三日」山崎小学校開校記念日に掘り出して開封しようと約束しています。

カプセルの中には、郵券の値上りもあるかも知れないと、五万円の貯金通帳を入れています。

タイムカプセルに水が滲んだり、ねずみ、もぐらの被害等色々予想をして大切に埋めました。しかし、予想もしないどんな被害を受けているかわかりません。今となっては、万事無事を祈るのみです。

このタイムカプセルには思い思いに自分の品々を封入した児童も今は立派な社会人となっているでしょうし、大学生になって頑張っているでしょう。私も七十四歳になりました。

山崎小学校中庭に眠っているタイムカプセルが目を醒ます日が近づいて来ました。

開封につきましては、色々の作業その他ご迷惑をかける事となりますが関係者の皆様よろしくお願いいたします。

「やまさき文化」二十号の原稿の依頼を受けましたので、敢えて、山崎小学校在任中の一事業の中で、昭和五十九年度在学の児らと共に埋めたタイムカプセルの事を寄稿いたしました。

ついでの事ながら、このタイムカプセルに関係の方への発信とさせていただきます。

（元山崎小学校長）

趣味と生きがい

さつき民踊グループ
西川慶子

ある日、お友達から踊りのグループが設立されたので貴女もこないかと、さそって頂き、踊りは習いたい、でも私には仕事がある、仕事が一番、店が一番と頑張っていたころだったのですぐには即答出来ませんでした。

そのさつき民踊グループが昭和五十四年四月に設立され、目的が踊りを通して地域文化の向上に少しでも役に立ちたい、老人会、婦人会、町の行事等に密着したボランティア活動を続けて行きたい等のグループでした。私はとてもみなさまと同じようには習う事は出来ないが、長い目で先生に見て頂きたいと会員の中に入れて頂きました。

一年に一度の発表会にも参加出来ない年が続きました。残念で涙する事もたびたび、そして初めて発表会に参加出来ました年に突然の事故で息子を失ない、この世の中まっ暗になってしまいましたが、その時趣味の踊りや故大谷先生の励ましなどで涙をながしながら、みなさまの輪の中に入れていただきました。そんな私の姿を見て三人の孫達が小さな手に扇子が重たい頃から習い始め、孫とおばあちゃんでいろんな所にボランティアに参加しました。そのころ大谷先生が故人となられ、今日までの仲間とも別れ別れに、又さみしい思いをしましたが、いくら少人数になってもさつき民踊グループ設立目的をけがさないよう頑張ろうと微力ながら考えてなんとか踊りを続けておりました。そんな時、すばらしい坂東流、坂東寿賀幸先生にお出合い出来、ご無理を言って今日習っています。

私達グループは前にものべましたようにボランティアを主としています。先生にもそのお気持ちでご理解を頂き、又若い会員さんも増え今日では一年を通して十回前後地域ボランティア特に養老ホーム等に出むきみなさまと楽しく交流が出来ています。

月日のたつのは早いものです、ふり返って見ますと二十年踊りを通してボランティアに行けました。こうしてさつき民踊グループが続けられますのも設立以来の会員さまや故大谷先生のお力を忘れる事は出来ません。又今日お世話になっています坂東寿賀幸先生、そして私自身はもちろんですが会員のみなさまが健康で、又ご家族の協力で続けて行けるものと感謝しています。

いつまでも、明るく元気でボランティアが続けられますよう心掛けおけいこに励みたいと思っています。

バンブーファイブと共に

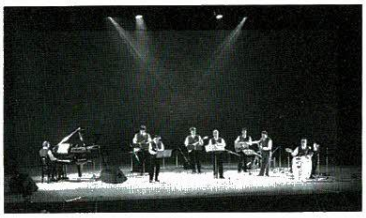
バンブーファイブ
松岡潔

早いものでバンブーファイブを結成してから、もう五年が過ぎました。その間にはいろんな事がありました。初めての発表会。それは秋の文化祭でした。私達の番が来て、ステージの上で準備をしていました。もうあまり時間がありません。ところが何と言う事でしょう。アンプから音が出ないのです。パニックになって焦っていると、すでに幕が上がり始めているではありませんか、リーダーの千田さんがカウントを数えています。「一、二、三、四」曲が始まってしまいました。しかたなくほとんど音の出ないギターを掻き鳴らしました。箱ギターなので少しは音が出ています。そうしている内に一曲目が終わりました。拍手も鳴っています。その頃からやっと楽譜が見えて来ました。二曲目が始まりました。まずまずの感じで曲が進んでいます。フーと息をついたのも束の間、あろう事か今度は尺八が曲の途中から、とんでもない所へ飛んでしまっているではありませんか。こうなったらもう全員バラバラです。早く早く終わってくれと祈る気持ちでしたが、気がつくとエンディングに入っています。「やれやれ何とか終わりそうや。」曲が終わると大きな拍手が続いています。ステージの袖に戻ると次の出演者の「よかったでー」の声に、少しは気持が和らぎました。尺八の人に、「どないやったん？」と聞くと、「楽譜が真っ白になって何も見えんかった。」やっぱりそうか、同じやな。「僕もアンプから音が出んかったんや、何でやろ」「アンプの後のスイッチ、入れたか？」アンプは借り物でそんな所にスイッチがあるのを知る由もありません。大失敗の出発でした。

そうして、この日からバンブーファイブの歴史が始まったのでした。

今では総勢八名で、年数回の演奏会に出演し、皆で心から楽しんでいます。年令を越えてたくさんの友達も出来ました。

バンドを作ろうと言って、私を誘ってくれた仲間に心から感謝しています。これからも体の続く限り、音楽を通じて、バンド仲間と生涯の楽しみとして、和気藹藹と続けて行きたいと思っています。



「碁吉会姫路大会に参加して」

囲碁同好会
松本　明

姫路市の北部に位置する広嶺山頂近くにあって、眼下には賑やかな街並、遠くには淡路島や青い瀬戸内海の波に浮かぶ家島諸島等、播磨灘を一望する「ハイランドビラ姫路」が、今回の〝碁吉会大会〟の会場で、十一月十日から十二日の二泊三日の日程で催され、その内十一日と、十二日に、私も初めて参加させて戴きました。

そもそも〝碁吉会〟とは、碁をこよなく愛する、云うなら「碁が飯よりも好きな」碁キチ達の集まりで、皆の共通した心を謳った「碁吉憲章」なるものもあります。

会長の高野圭介氏を中心に、月二回の、「刻の会」、年二回の「刻の陣」等の例会が催される様です。

今回の「刻の陣」には、東は東京、西は九州から馳せ参じた、極く初心者から九段格の高段者を含む、バラエティに富んだ多士済済の人達で、年令も、一人の小学生の他はほとんど中年以上の女性十七名男性三十七名の方々でした。

日程の殆どが対局時間に当てられていて、内容としては◎八名一組のトーナメント、◎男女混合ダブルスで対局のペア碁、◎遊び心主体の輪投げ碁、◎個々に誰とでも打つ自由対局等々で、その中で最も新鮮に感じたのがペア碁で、ほのぼのとした楽しさが印象に残っています。

このペア碁を、九段格の男性と組まれた三級の女性の言によると、「これまで一度も経験したことのない、内容の碁で、波乱万丈、スリル満点、はらはらどきどきわくわくする最高に楽しい碁でした。」とありました。この様にペア碁の楽しさ、良さが女性囲碁愛好家の発掘、獲得に威力を発揮しているとか…。

夜の宴会には、各々自己紹介や囲碁観の発表、その他色々のイベントが次々とあって、私も思いもかけず碁歴半世紀賞なるものを頂きました。

時刻も移って、三々五々碁席に移動し、日付の変わるまで囲碁三昧に浸る人も、私も含めてかなりの人数でした。

記念写真をお送り頂いた中に大会の様子や雰囲気等をお察し頂ける句がありましたので、披露させて頂きます。

「夜も寝ぬ　姫路碁会は　早終えぬ」
「碁吉会　女も男も　ハイランド」
「囲碁よりも　酒飲みに来る奴がいる」
「手談より　口で戦う　懐かしさ」

今私も、「友あり遠方より来たる　又楽しからずや」の言葉を噛みしめています。

邦楽邦舞に親しむ

邦楽邦舞研究会
井口定子

今年もまた、ふれあい文化祭が盛会裡に幕を閉じました。これだけ多くの会の方々が、日頃からそれぞれの道に精進され、溌剌と活動しておられる様子にじーんとつき上げて来るものがありました。

私事ですが、座骨神経痛の診断をうけ、通院もずい分長くて、二ヶ月程おけいこも休んでいましたが、最近やっとけいこの方もできる状態になりました。

久し振りに訪れた師匠のもとで、「鶴亀」の曲に合わせ、稽古に余念のない仲間をみて、危うくポロリとなりそうでした。私も中断していた「春雨」をさらえてもらうのですが、何とも体の動かない事と言ったらなさけないやら、恥ずかしいやら、本当に日頃の積みかさね、努力の大切さをいやと言う程、思い知らされました。

けいこの合間合間に、師匠のきびしい指導の言葉がとんで来ます。

「それ、片方の手、死んでしもうとる。」
「その足、ちがうでしょう。」

ふだんやさしい師匠も、芸の道になると少しのいい加減も許されません。

「ほんに、何をするのも大変や。」
「なに、これ位の注意では、へこたらへんわ。」と、勇気さえ湧いて来ます。でもこうして注意を受けながら、汗を流しながらおさらいをしていますと、何ともいえない心の安らぎとその曲の中にどっぷりとつかっていけるのです。

私達、少人数になっていますが、仲間はみんな古典が好きで、古典を心から愛し、その中に浸っていたくて「むずかしい、むずかしい。」と言いながらも、そのむずかしさが心地よくて、師匠のきびしい指導がすがすがしくて、けいこをつづけております。

邦楽邦舞の年令層もだんだんと高齢化して、この間の文化祭にもなつかしい方々の姿が見られず、一抹の淋しさを感じたものです。後継者がなかなか育ちにくいと言われるこの町の邦楽邦舞の現状で不安と淋しさを感じるのですが、また世の進歩と共に新しいことに向かっていくことも大切な事であろうと思っています。

洋楽と邦楽を見事に合体されたバンブーファイブの演奏、新曲に合わせて、日舞の良さを十分に発揮された舞踊の数々、本当に大変勉強させて頂きました。

こうして進んでいく世の中で、いつまでも古典にこだわり、古典を愛し、「むずかしい、むずかしい。」と愚痴をこぼしながらも足が痛くてもそれでもけいこをやめようとしない私達仲間。

これからも遅々とした歩みではありますが、この心の通い合った仲間たちと長唄に合わせ、端唄に合わせて、師匠に指導していただく古典の舞踊に精進して行きたいと願っております。

サツキ「光の司」の戯言

播磨サツキ会
立花　正太郎

私の生国は、下野の国鹿沼の在で、生まれて僅か二年で八十糎にも伸びたヒョロヒョロのサツキで、宍粟郡農協連合会の花木センターに昭和五十年頃に引越した。

引き取り人のないまま二、三年がすぎた。早春のある日大勢の中から選ばれたサツキ「光の司」が私で、この家のサツキ棚に居を定めたのが昭和五十三年頃だった。すぐに太い針金でグルグル巻にされ無理矢理に曲げられた。その苦しさは今でも忘れることは出来ない。毎年六月になると私の仲間はそれぞれ美しい花を咲かす。

私のサツキ棚からもこの時期になると何処に行くのか主人に運び出される者が沢山ある。七月になると新しい顔や懐かしい顔が棚に揃って一安心となる。花が終わり暑い夏が来て私が一番水の欲しい時期になる。私の主人はサラリーマンで不在のときは奥さんが主人以上の可愛いがり様で私達の生命が何度救われたことか、感謝の念にたえない。秋になると私達は黄色赤色と錦の衣をまとった様に化粧をする。十二月から二月迄は寒い寒い冬で雪や氷にいためられながらひたすら春を待っている。

この様な繰り返しで六月になると主人が手にとって見つめることがある。隣の仲良しだった日光には、白い紙の札がつけられ五千円とかかれている。数日の後日光は何処かに行ってしまった。主人のひとりごとで、昭和天皇がなくなられて平成の御代になったとか、私の身にも少し変化があった。最初は丸い鉢が私の住居だったが平成の御代になって四角い鉢に転居をすることになり何となく偉くなった様に感じた。主人も開花期になるとテントの下に入れて雨や直射日光を防ぎ花を楽しんでいる年が多くなった。

平成八年五月末日早朝私はトラックに乗せられ山崎文化会館の駐車場に美しく設営された山崎町第三十七回さつき祭りの台上に飾られた。次々と私の仲間が同じ様に飾られ台の上は一杯になった。午後になって、見慣れぬ数人の人が私の台の前を行ったり来たりしていたが夕方になり一杯並んだ私達の仲間の前に美しい字で書かれた短冊がおかれて行く。私の前にもおかれた。薄暗い中でよく見ると兵庫県知事賞と書いてある。話しに聞いたが私が眞逆県知事賞とは周りが一変に明るくなった様に思った。翌日は沢山の人出に面食らうばかり、主人も前年に続いての知事賞の受賞で永年の夢が実った事でさぞ満足だったことだろう。

平成九年の花後私は植替をして貰った。鉢植のサツキは何年かに一度植替をして貰うのが普通で、若い間は気にならないがだんだん年をとるに従って植替は大手術となる。私も今回の植替は殊の外回復がおくれて平成十二年のさつき祭りに出品をして貰ったが回復がおくれて選外だった。会場は今年から夢公園とかに移され賑やかになった様に思ったが、私達（サツキ）に関心を示す人が年々少なくなっている様で情けないことだ。又飾られる私達の仲間も今年から少なくなり余計に淋しくなったのも事実で残念なことだ。聞く処によるとこのさつき祭りは山崎町にとっては最大のイベントで今後一層さかんにしなければならない様である。

私の主人も七十三才となり、私達の世話も年々大変の様で何とかサツキに関心のある若い人達が出てこないと山崎町にサツキがなくなる日もそんなに遠くないだろう。サツキ「光の司」の戯言。おわり

光の司の現在
（樹高90cm 周り23cm）

山崎町文化協会役員

会長　壺阪　壽
副会長　荒木　俊介
　　藤井　慧乗
　　本條　衞
理事　長川　耕一
　　福岡　久藏
　　久宗　丑雄
　　伊藤　勉
　　岸本　正理
　　安井　道夫
　　栗山　節子
　　芦田　八重
　　谷川　ヒデ
　　伊野　操治
　　志水　正信
　　石野　和雄
　　竹添　和彦
　　三宅　宏佳
　　西川　慶子
　　安井　克典
　　中道　忠志
　　春名　田江
　　片山　澄之
　　久保　洋
　　千田　淳平
　　立花正太郎
　　治田　浩子
監事　三浦　昭平
　　庄　清
会計　井口　武一
事務局　藤村　清一
　　河本　雅視
　　大西　耕治
　　下多　謙一

山崎美術協会
山崎植物同好会
新潮会
山崎郷土研究会
山崎文学会
山崎歌人協会
山崎俳句協会
山崎茶華道協会
山崎謡曲同好会
山崎町郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
山崎囲碁同好会
山崎将棋同好会
さつき民踊グループ
昭和会
平成会
山崎詩舞道連盟
山崎町合唱連盟
播州山崎太鼓
バンブーファイブ
播磨さつき会
山崎児童合唱団

（敬称略・順不同）

『文化協会のこと』

山崎町文化協会事務局

山崎町文化協会は町内の文化団体を結集。町当局、同教育委員会、山崎文化会館はじめ関係団体と協力して『いつまでも住みたい・夢と魅力あふれる・こころ豊かな文化の町づくり』を目指して活動している。

同協会の加入団体は二十二団体。七十四グループ。会員数は二千二百三人（平成十二年六月一日現在）。毎年、「春の芸能祭」「秋のふれあい文化祭」「講演会」の開催。文化施設の「見学研修」。機関誌「やまさき文化」の発行。県内各市町文化協会との「文化交流事業」「文化シンポジウム」への参加など続行。町内で催される文化行事の後援などにも努めている。

単位団体では郷土の伝統芸能の継承、芸術文化の振興、自然を守るための植物観賞、郷土の歴史研究、日本古来の邦楽邦舞、民踊、謡曲、詩吟、扇舞、太鼓などの練習と発表。文学、短歌、俳句との取り組みなど多様な活動を繰り広げている。

平成十二年度に実施した主な事業は四月に「淡路花博」見学研修。五月に「春の芸能祭」。六月に文化協会の「理事会・総会」と「講演会」の開催や「地域文化を考えるシンポジウム」への参加。十月に「文化のこみち竣工式」。十一月に「やまさき秋のふれあい文化祭」の開催と「西播磨文化交流会」への参加。同年度内に機関誌「やまさき文化」№二十号を発刊した。

「文化のこみち」づくりは町当局と協力。最上山ふれあい森林公園内で工事をすすめていたが、歌人協会、俳句協会の大きな力添えもあって平成十二年十月に完成した。同公園内の展望台から千畳敷広場西側までの間に歌碑と句碑三十八基、標識碑二基が建立されている。散歩がてらご覧下さい。

経済的な豊かさは、もちろん必要だが、近年、生活水準の向上、高度の情報化、科学技術の進展などによる時代の変転で、町の人たちのニーズも「もの（物）の豊かさ」から「こころの豊かさ」へと変化してきている。そこで文化協会事務局としては、町の人たちの「こころの豊かさ」を求めるニーズに応えるため、今後は時代の変化に即応した新しい郷土特有の文化活動の推進にも努め、町の文化発展のため、より一層、尽力する方針。みなさんのご協力をお願いいたします。

編集後記

編集長　荒木俊介

前号でも触れておりました様にご要望に応じて本号より活字を一回り大きくし、同時に紙面もB5版よりA4版にしました。新しく二十一世紀の第一年目を迎えるに当り、更なる内容の充実を図り、発展を期したいと覚悟を新たに致しておりますので、宜しくご協力賜ります様お願い申し上げます。

今回も各団体よりその活動状況や素晴しい随想などをお寄せ頂き有難うございます。この「やまさき文化」は内容に於いて西播各文化協会の機関誌の中で毎年最高の評価を得ていることをお伝えしてお礼にかえさせて頂きます。

今度の特別寄稿は、今、経済学の最先端といわれている金融工学の研究に携っておられる山田町出身の三浦良造氏にお願いしました。国際的視野に立った経済学だけに今後の氏の益々の活躍をお祈り申し上げます。

安井道夫氏の「茶色の話」一読、多方面に於ける相変らずの造詣の深さに才人の面目躍如たるものを覚えます。

表紙並びに挿絵の担当は、益々華麗なタッチの冴えた福岡久藏氏にお願い致しました。宜しくお願い致します。

あらゆる印刷の企画から製品まで
株式会社 支林館印刷所
宍粟郡山崎町山崎53
TEL（0790）62－1147㈹
FAX（0790）62－0081

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAISANGYO CO.,LTD
〒671-2213 兵庫県宍粟郡山崎町山崎287-6 ☎(0790)62-1700
飛石商事 dept. 〒671-2213 兵庫県宍粟郡山崎町山崎287-6 ☎(0790)62-1700
トビイシ住設 dept. 〒671-2213 兵庫県宍粟郡山崎町今宿(小)1 ☎(0790)62-3610
CREATIVE dept.

for happy day happy life
飛石建設 dept. 〒671-2213 兵庫県宍粟郡山崎町山崎287-6 ☎(0790)62-1703
飛石レンタリース山崎 〒671-2213 兵庫県宍粟郡山崎町山崎287-6 ☎(0790)62-1703
飛石レンタリース姫路 〒670-0934 兵庫県姫路市豊富町豊富甲538-1 ☎(0792)63-4022
飛石レンタリース龍野 〒679-2201 兵庫県たつの市揖保川町正條字上鳥居5410-36 ☎(0790)32-5411

✦最新型カラー現像機導入✦
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コエエカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3
本　店 TEL(0790)62-2089
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

料理旅館・割烹

創業
文久元年
菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287
TEL (0790) 62-1119(代)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181　TEL(0790) 62-0052

ＯＡ機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器

office service
イトーオフィスサービス株式会社

代表取締役　伊　藤　和　久
山崎町中広瀬117－12　ＴＥＬ(0790) 62－0126

にしんのeバンキング
テレホン.モバイル.インターネット
とても便利になりました。

にしんの住宅ローン
あなたのプランに合わせて
ご相談下さい。

豊かな街づくりをお手伝いする
西兵庫信用金庫
TEL 0790-62-2020(代)

清酒 山陽盃
ふるさとのお酒
確かな品質
サンヨウハイ
本醸造 しぼりたて 龍神
純米酒 きつき 一献
山陽盃酒造㈱ TEL(0790)62-1010(代)

MIKIMOKU
株式会社ミキモク
兵庫県宍粟郡山崎町庄能120
TEL (0790) 62-1238(代)
FAX (0790) 62-5180
㈱ミキモク販売
㈱マンクス
㈱ミキモク東京営業所
埼玉県草加市氷川1234
TEL 0489-22-5656
FAX 0489-28-5450
株式会社九州ミキモク 福岡県大川市向島字中開118 TEL (09448) 6-3148(代) FAX (09448) 6-3419
株式会社タイミキモク (本社)タイ国バンコック市ニューロード1173-4 TEL (02) 236-4694 FAX (02) 236-7198
合作工場 華豊美樹木 中国遼寧省荘河市延安路2段125号 TEL0411-8612720 FAX0411-8613307

＊安全で快適な生活をお届けする＊
JOMO 株式会社ジャパンエナジー 特約店
ホンジョウ
本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)63-1234(代) (0790)62-4321(代)

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司 あらき
本 店：播州山崎町さつき通り (電)62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)62-0160